

偽うそもいひ過すこして

契ちぎりの豕いのこ餅もち

ひそかに詠ながめ候ひき人  
腰こしばりも銀かねになる  
金太夫がしかけ  
いづれこゝろの外ほか  
とかく知れぬは命いのち

一 大釜の抜き残し

世よは外聞包ぐわいぶんつむ風呂敷ふうろしきに替帷子かへかたびら、夏なつは殊更ことさら供ともの者連ものつれずして自由成じゆうなりがたし。昔むかしは定まつて柳行李やなぎざりに物を入れ、鼓つづみの調しらべの古ふるきにてからけ是これを持たせけるに、それは葬禮そうらいの時ときか、公く事じ人の供くわいなり。近年きんねんの大臣だいじんは小島染こしまぞめの両面りょうめん、又はべんがらの大縞おほじまの風呂敷ふうろしきに暑じゆんき時とき分ぶんも暮方くれがたの用意よういして、單物ひきもの袷羽織あはせはおりを入れさせ、利根りこんなる小者こもの連つられたるは、古金買ふるかねかひに見せても三百貫目さんひゃくくわんめより内の身躰しんたいにはあらず。爰こゝに難波津なんばつの横堀川よこほりがはの邊へりに姪酒いんしゆ二ふたつに身をわけもなう、胸むねは煙けぶりの毎日まいにち鹽屋しほやのふじ崎さきといふ美君みきみに焦こがれ、銀かねでなる分里わけざりの女めながら、後のちは勤外つとまほかになし、此男このおとこより誰たれにかはと、黒髪くろかみの半なかばきりて、世間よこにこれを隠かくさず、いとしさに此こゝ姿すがたと、名なに立つ年は十九じゅうきゅうの花はなの咲さく比ひ、此里こゝの色いろも香かもひとりして知しつた顔かほ、少しすこは悪にくいほどなれども、いかにしても他ほかの女郎おんなのなるまじき事は、世よにある客きやくを見捨みすて、揚屋やうやのかどを闇やみにさへびくくして、春はるの夜よのひとつ著物袖きりものそでの嵐あらしを厭いとふに、因果いんがはふる雨あめかなしく、宿やどの軒下のきしたも人ひとの提灯ちやうちんうるさく、このまへ取出いの時とき分ぶん、家買いうて取とらせたる太鼓たいこが方かたへはしり込みこみ、聞きしる聲こゑかすかに傘かさ一本いっぴんかせといへば、女房にうばうが下女したむすめにいひ付



廿五日様  
法然上人の  
忌日正月二  
十五日なる  
よりいふ

慰めぬ一原  
本慰めんと  
あり

けて、編笠ならばござるといふ。さても足もとを見立てたる返事する。木履かせといふ  
ならば、日和の好い時お出なされと申すべし。さりとは物しらすめ、米の百目する時  
娘を八坂へ遣る談合、廿五日様の名號まで質に置き、後世を取りはづす時も、金子十兩の  
合力、前後遣つたる物を勘定すれば、家の時より此かた三貫七百目、小判四十七兩、  
米十八石、著物羽織二十一、其外ちよこく心付けせし事、留帳にはつけず覺えがたし。  
これを忘れて今度傘一本貸してくれぬは、さりとては酷き仕方なり。これを思ふに女郎  
程まことあるものはなし。いひかはせし事を違へずして、身をしのび命にかけて、一夜  
もあはれをとひ慰めぬ事なし。外のさはりとなること更に可愛くなりて、とかく逢はぬ  
があれが爲めとて雨に身細めて、氣のつきる軒づたひ、やうく宿に歸れば、町の年寄  
ども念佛講のかへりと見えしが、我等が門に立ちとまりて、主が聞き居るとも知らず、  
いづれ此家二十四貫目には買徳なり、此格子取て捨て、錢店か、蠟燭を出し、裏の長  
藏を小借屋に直し、かど引きまはして表のぶんは七分庭の算用にして、一ヶ月に百九十  
目づつ納まれば、これぞ好き隠居屋敷と、賣りもせぬ先に人の家の指圖をするは無念な  
がら是非もなし。聞くほど堪忍ならねど、家質の連判頼みおけば、世上ほど自由にならぬ

ありさま  
われさまの  
轉訛にて貴  
方の意

ものなしと、男泣すれど、萬事は歸らぬ昔と思ふに、筋むかへの兩替屋の親仁のいへるは、  
親の庭好して植置かれし蘇鐵は今にあるかといへば、それはいつの事、逆も賣家の覺悟  
して、岩組まで一つも以前の形はなし、あんな仕果世にまたとあるべきか、既にありさ  
まの鞆になる筈を、首尾せいでお仕合せ、私の西隣にも親懸り、若い子どもの風うへ  
に置く事もいやと、鼻に皺よせて、物憎さうにいへり。おのれ後から踏み倒してもと  
思へど、扱も世間は思案する程むつかしく、ひそかに戸を叩けば、五十あまりの下女罷  
り出、よいほどにお歸りあれかし、八つの鐘聞てからもしばしの事、といふ聲ばかりし  
て闇がりなり。火が消えたかといへば油がないといふ。それ程の才覺がならぬかと、火  
うち箱捜して、茶の下へ焼き付け、そのひかりのうち二階へあがり、古き長持をこぼち  
て、終夜これを焼火して、ひとり文など讀みながら、宵の袖をあぶるうちに、門を遠慮  
もなくたよけば、寢た顔も成がたく、誰といへば、色友達四五人、むりやりに走り入り、  
寒き夜の庭火、亭主が物好、どうもいへぬと、是等も傘なしの濡身を干して、何も馳  
走はいらぬぞ、酒は一つ飲ませといふ。つねく贅を申して何時なりとも御出遊ばせ、  
内にさし合はなし、のぞみ次第の食悦さすべしと、其言葉も是非に酒を吞する所と、徳



かどたふさ  
ぬ一扇の折  
目のいたま  
ぬこと

利手樽をさがせども、いかなく、一滴もなかりし。小半買ふべき錢もなく、此才覺書さへならぬに、夜の事なれば、ましてや分別出ざりしが、大庭に十七ならべて只ひとつ賣り残せし大釜引き抜き、幸ひ横町に古金屋のあるこそ仕合せなれ、たよき起して錢の俄に入る子細を語り、つぶしの直にして四匁にまけてやれば、錢渡しさまに夜中に釜は何とも合點はゆかねども、よもやはばかりを盗んではござるまいといふ。神ぞ口惜しけれど、斷り申して錢を請取り、やうく外聞を酒に包みて、此醉の餘りに明日はこよひの憂晴しに道頓堀に出、中の太夫本にしてこれの亭主振舞といふ。かたじけなしと約束かためて別れ、その明の日いよく御出の使、追付お後よりと、物のいらぬ事なれば男つくりすまして、夜前著物敷のばして、樺染の平帯、長柄のひとつざし、かどたふさぬ大鶴屋が扇、見た所は今も大臣なり。けふ一日のやとひ草履取に、奥嶋の風呂敷かたけさせしが、このうちへ其名染込のうれん疊み入れ、人目には替著物と見るらんと我が心のはづかしく、眞齋橋筋に歩を南へ急けば、芝居のはての人立に、小間物屋の男が打水にゆきかより、腰から下へひとしほりに成て、著替なき身の悲しく、心腹立てて眼色變れば、主はしり出、段々御尤千萬に存じたてまつる、此男め大和より二三日あとに爰許へまる

氣の毒—心  
苦し

はずむ—お  
ごつてやる

り、つちけの離れぬものなれば是非に御勘忍と、亭主結構なる一言に、ねだるべき力なく、侍衆にかけぬやうにしやれと、言ひ捨てて通れば、これへ御腰をかけられ、御著物召し替へらるべし、さあく座敷へといふ程氣の毒、くるしからぬとて濡れながら三津寺八幡のまへに行き、このあたりに旅役者の笛ふきに伊勢の吉太郎といふもの、折節は子どもの一座によびて、二三度も物取らせたる事あり。是より外の茶屋役者皆々分あしく立ち寄る事は思ひもよらず、裏借屋住の吉太郎にたづね寄れば、丸裸にて立ち出で、お久しや旦那、斯る埴生の小屋へ御立寄、かたじけありといふものぢやと、俄に煙草盆の塵は拂へど、裸で飛び廻るを見て、これは氣根強しといへば、只今大酒致しましたといへど、上氣をして、旦那もこの御小袖の濡はと不思議を立る。はじめを語りて、これを日當へ干せといふ。大臣も丸裸になつて、いづれ今日はあたまかな日ぢやと、椽がはに立ちならび齒をくひしめて語り、我等は今日に限つて著替もたせて参らなんだ、其方がいつぞやの郡内編の著物すこしの程かせといへば、我がはだか何を隠しましよ、只ひとつの郡内、裏ばかり洗はせまして、隣へ衾に参りしうち、此仕合せと語る。大臣横手を打つて、扱も事の缺けたる内證かな、近日著物羽織拙者はすむでござる、今日は宿に



首尾悪しければ取りにもやられずと、ふたり裸で待つうちの身振さまふ、可笑しく、やうやう西日になつて、干したる著物、ひあがりて大臣これを召せば、吉太郎仕立著物も出来て、二人ともに常の姿となつて踊り出で、待ち兼ねる振舞の方に行けば、膳はしまうて酒の面白き所へ立ち出、いやといはれぬ人に留られて、いづれもの手前迷惑千萬といふ。今まで御隙入、御飯はまるつたかといはれて、いかにも喫べましたといへば、其通りに濟みて、空腹の亂酒、肴の中にも生貝など食ひ盡して、夜食までの待遠く、吸物の出るたび、もし餛飩かと思れば、切かけ烏賊のしかもかすかに、是等に腹もふくれず、笛吹の吉太郎は氣をつくして立つて嘔る。一座は衆道の色に前後忘るゝ酔心。我を覺えず、これは寒いといへば、御著物の入りたる風呂敷取てまるつて、大勢の中にてこれをあくれば、紺染の暖簾に丸の内に仁の字付きたるを取り出せば、此座興覺めて、おのゝ見ぬ顔するもなほをか。随分氣強きものながら、酒醒めて、浮世の人を恥ぢて、是より無用の色道と思ひ切て、家財しまひて其身ひとりの草庵、昔の友にあふ事絶えて、髭おのづからに伸ばし、手足終に洗はず、渡世に江戸元結の賃びねりして、一日暮しに、難波の堀詰に身を隠し、大寺の櫻は近きに五とせあまり春を夢となし、蝶の定紋も付けず、

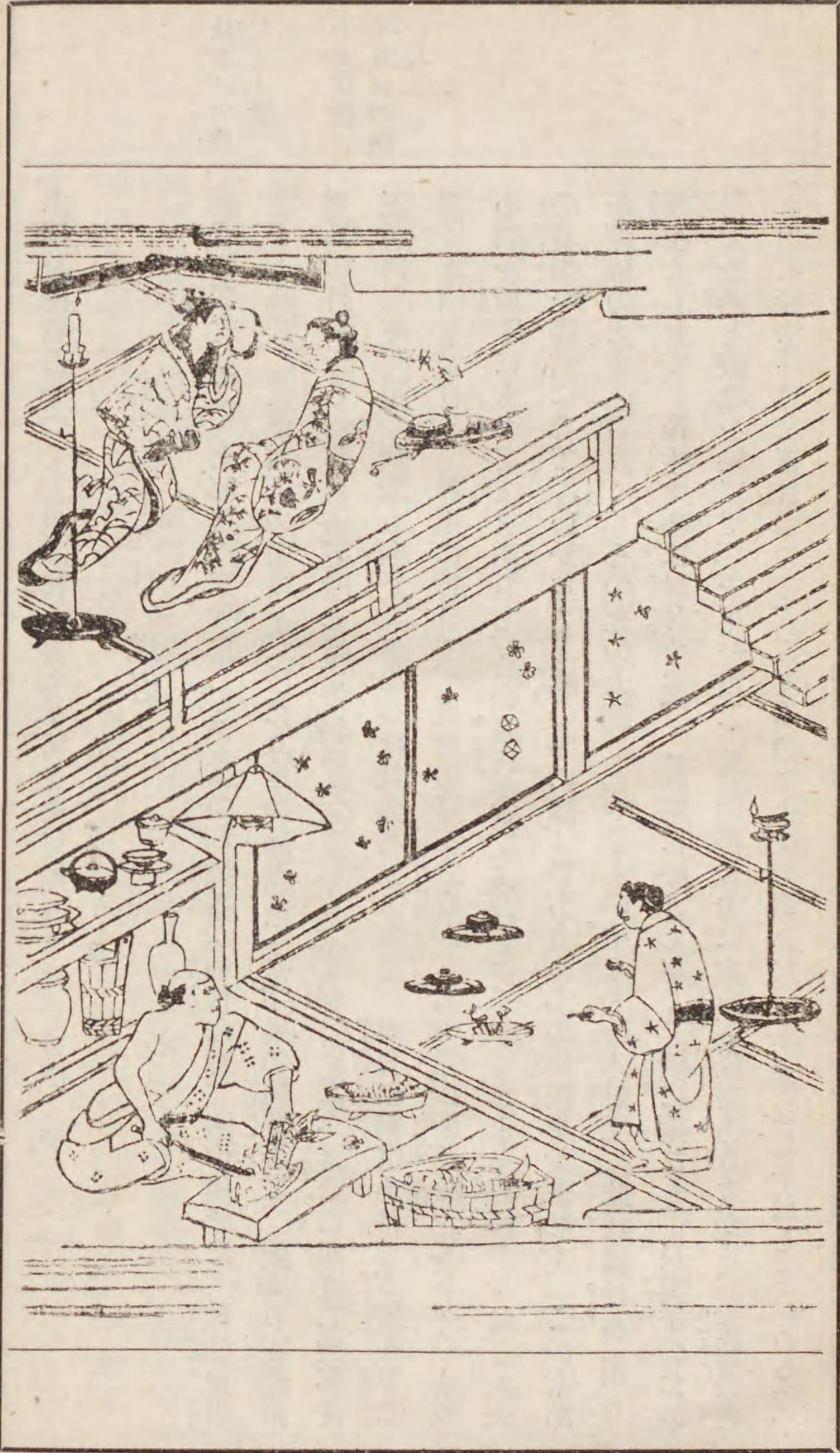
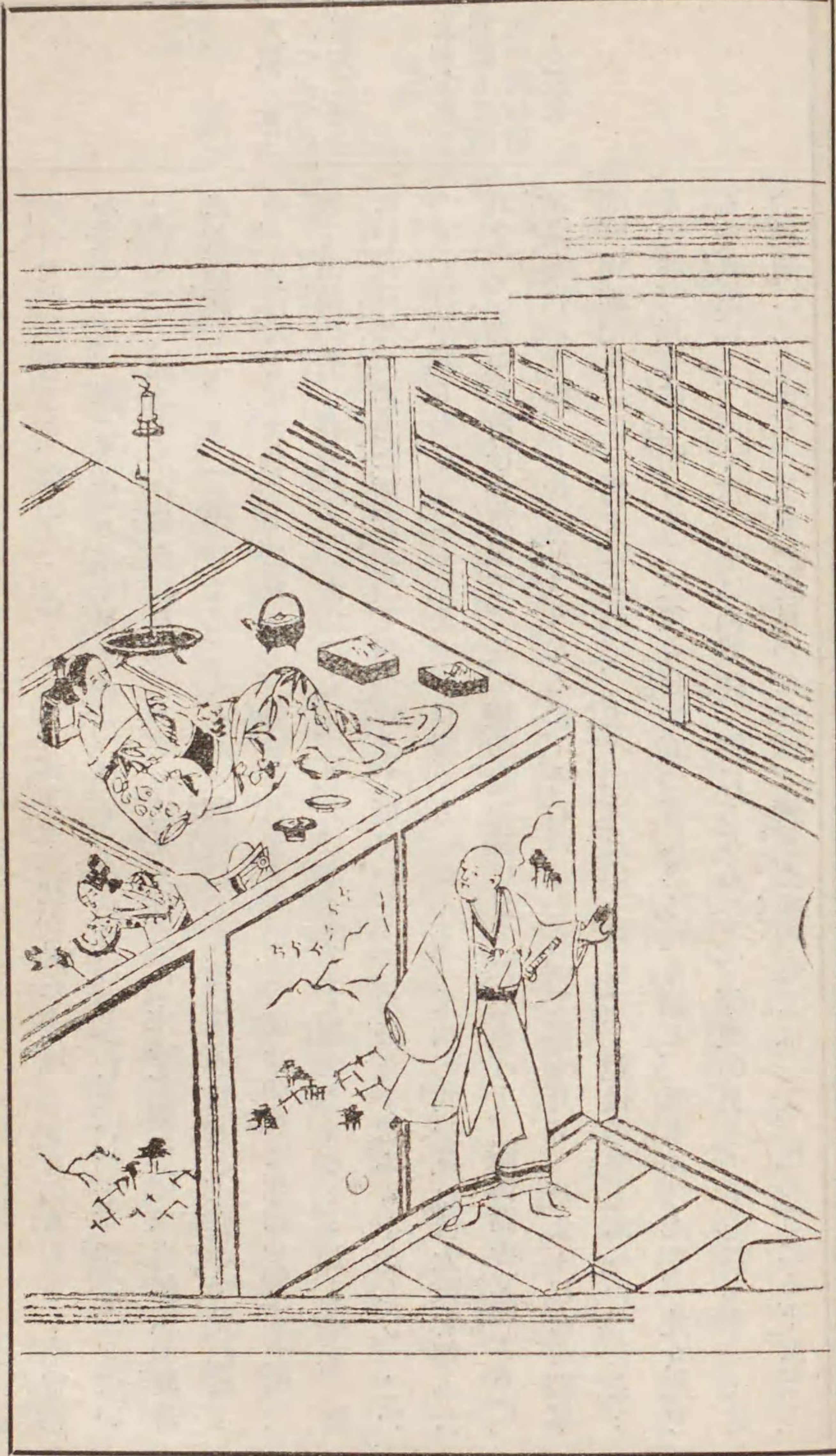
木綿を淺黄にやつて、世は軽く暮して埒をあけぬ。

二 四十九日の堪忍

長者に二代  
なし一諺  
十五貫目一  
千五百の誤  
なるべし

長者に二代なし、女郎買に三代なしと、京の利發者が名言なり。洛中廣きに、歌仙分限とさよれて、三十六人の中にも、ひだり座の第一、二文字屋の何某とて、親より家藏諸道具の外に十五百貫目書置せし時、連判のおのゝ是をあらためて、跡取に相渡し候事實正明白なり。是を請取り四十九日の朝は旦那坊主よびて、夕食に精進あけて、箸を下に置くと宿をかけ出、島原に行きて、丸屋の亭主合點か、おやぢが所務分、見たかくと、小判を逆手にもつてまきちらし、この家内繁昌と喜ばせける。これより心にまかせ、太夫の石州を揚詰にして、いかなく脇の男には、ひぢりめんの戸帳をがませず、この女郎を祕佛の太夫と名高く、その比の太鼓、しやくしの徳入といふ針立、此祕佛様を預り、晝夜まもりて、後生大事に目付する。これ戀に心ざしなく、情に望なし、只妻子のため何も身過と療治を捨てて、一年一貫二百目の御合力に定め、我宿ありながら、年越の夜も内に寝ず、目に正月させて、こぎみのよき首尾聞きながら、妻なし千鳥ととびあるく。







天職―太夫  
につぎての  
遊女天神

太鼓女郎―  
遊藝もて酒  
席の興を助  
くる遊女

引舟女郎の帯とき、髪こそぬるもかまはず、木枕が見えずば、よきもの有りとも、空重箱を横にして、誰に遠慮もなく足手をのばし、後のすけを呑むまい物と、現のやうにいひ寝入に、此おもかけ燈火に移り、あらはに見えけるに、末の女郎ながら、白無垢の肌著に首筋麗しく、すこし中びくにこそあれ、薄皮にしてちひさき口もと、此中で見ればなり、大津などの天職よりは見よし。毎夜十八匁がものを、國土の費と無常を觀する所へ、頓て出前の禿、我身を人のものにして、しどけなく腰まで裾のまくるよもかまはず、酒にいたみて、あした雨がふつて四つ時まで寝たいぞと、おほえず言ふもをかしき。こいつもわけを知らぬさまにも見えぬ、只置くもむねんと、又次の間を見れば太鼓女郎ふたりまで、九匁が所ひき草臥て、三味線の筒を枕に足もたしあうて、懺悔話を立聞するに、刈藻といふ女郎、しかも好さうなるに、それにこしらへて置く身も、我まよにならぬ事は、氏神稻荷さまを誓文に入れて、去年の九月の十四日に、肥後の衆と床へいつたまよといふ。我等は年明けて二三度も分の立つ客にあうたと語る。扱もふびんや、此女郎どもを買捨にして置くは、喰はぬ殺生、罪にもなるべし。傾城の男めづらしがる事、よもや世間にしるまじ。又臺所を見わたせば、柳真那板取りまはして、色めきたる下女ども、

残らぬたは  
け者―十二  
分の愚物

野秋―遊女  
の名

男まじりにうちふしけれど、誰かこれらに目をやる人もなかり。是をおもふに吉野の麓に花の盛をみず暮し、山崎の人郭公に耳ふさぐに同じ。爰もその如く女房見あきて、なんとも思はぬと見えたり。こんな所へ来て、たゞ居るはうかとした事ながら、つね々々律義におほしめして、大事の御番をお頼みなされしに、微塵もじだらくする事にあらずと、片隅に取りのき、小分別ありけに眉をひそめ、まる寝して随分さむいめを堪忍して、夜あけを待兼ねる時、大臣起きあはせ給ひ、徳入が寝姿を見給ひ、いつもその如くひとり寝するか、幸ひの手あきがあるに、さりとは無用の斟酌、さても残らぬたはけ者、爰で戀をせぬは風呂へ入て垢をおとさぬに同じ、ひえ物御免、どのふところへ成とも入れと、お言葉かよりて後、分際相應の遊興、是皆お蔭く、太鼓持ほど有難き世渡又もあらじと覺えける。此大臣一代の奢、行年七十四まで、腰の骨のつゞく程は色さわぎ、其子なほまた中比の野秋にはつと出て、見事なさはいしすごし、是も智恵すぎてやむるにはあらず、自然とおもしろさやみて、七十九の夏ごろより此道をとまりける。二代ともにも名を流し、三代目は二清といはれて、かゝる大臣なるが、程なくかよひ提灯の立消して、次第わろくやめにける。二代目に分散に極りたる身躰なりしが、舅のゆづり銀、



名譽—奇妙  
にも

二百貫目のひどき天秤にかけ出し、今まではつどきぬ。二清身に當ては、三十四五貫目つかひしに、わるい所を請取り、あたら身躰此男が皆になしたるやうに沙汰せられ、聲にも養子にも談合の相手なく、なんにも残らぬ身ひとつ、けふを暮しかねて、やうく長者町によろしき姨の許へにじり込むを、ゆかりなれば見捨てがたく、四五人ゆるくと世をわたる。金銀取らせば是も又半年立たぬうちに、かの里へはこびける。兎角俗をはなれさせよと、わうじやうづくめに坊主になせども、なほ此道をやめず。此うへは養ひころせと、座敷籠に押入れ置くに、是も忍び出、氣色を見るばかりにかよへば、いかなる事もや仕出しけん、賢き人に相談するに、自らやめさする遠島あり、こなたへ任したまへと、島原の揚屋町の横手に、ちひさき借屋を借りて二清に渡し、家賃の外に、壹ヶ月の合力銀三十目、何なりとも勝手次第に狂ひたまへといひ捨てける。爰にて名譽惡心かはりて、人にあふも迷惑して、後にははやり咄のうけ賣して、女郎さまより物もらひて口惜からず暮しぬ。

三 偽もいひすごして

香車—遣手  
(槍手)

鳩の目—錢  
の名  
前かたなる  
仕かけ—古  
風な策略

萬事洒落て、女郎狂ひの今程面白き事はなし。香車の衆が十四五手づつ先をみすかし、此大臣は九月の節句過より大年までは永いうちに、さのみ物費のない時を考へ、よい事をして取り、正月買さしづめになり、にけ道に伊勢へ年ごもりに親仁の代まるりすると、師走二十日比にいひ出して、太夫さまからはなむけに、二百目程入る肌小袖を取つて、置土産に小判進せて、四十末社の者どもには、すこし子細有てやめ分なり、内證聞いてから鳩の目一文のたよりにならぬ事、うちやつて置けと、何事ぞありさうに思はせ、如在なき女郎に、帥仲間から讃をつけさすは知れた事、そんな前かたなる仕かけ、四も五もくはぬ事、十月の始るのこに、こなたからいやといはせぬ男、きのふと暮してつひ冬のはじめの朔日になりぬ。大勢のつきあひ見濟まし、京屋のあるじに、やりての衆が、何か大臣さまへ、おそれながら御訴訟事と申せば、その時殿様は、置頭巾して書院毛拔を持ち、一步欲き訴訟かといふ。いかにもそれに似ました御事なり、豚のお餅の米と申すも、さもしき事ながらと申せば、いやく世間にする事はしたがよい、して何程入るぞ。此時いうて取らいではと、正月の餅米まで算用して、六石五升と申せば、女郎屋には大分豚を祝ふぢやなと、不思議がましき顔色して、紙入をなけ出す。小判の次手に十夜の盛



物代、霜月はをさめの庚申待、わたくし小宿の水風呂の釜を仕替の御合力、何や彼や取  
 集めて春までのつとめども、残らず御無心申し、その上に正月の事いまだ間のある義な  
 れども、外に申す方なければとさやとけば、此男遁ける分別かはつて、いかにも拙者請  
 合と、慥に宿へ申しわたせば、亭主これは珍重、さても見事なあそばされやう、恐らく  
 十月朔日正月のきはまりし女郎、新町廣しと申せども、此太夫さまの外にあらばいうて  
 ござれ、此首水もたまらずやるは、こんな大臣の御宿には今時分から仕著物がしまうて  
 有るものぢやと、むしやうにのほされ、前後かまはず、一座は柳にやつて立ちけるが、  
 風のなびきにかはるは大臣の心、てつきりと太夫さまへ難義をもつてござる所なり、時  
 にこなたから先にいひ出し給へと、その段々教へ置きしに、案の如く大臣無理を持つて  
 来さうな顔つきの時、しみんく深う仕かけて、けふ御出を待兼ねました、すこし御内談  
 いたしたき事は、此程兩度扇屋で逢ひまする田舎の大臣が、此方いやな程のほりつめ、  
 指を切りたらば、根引にして國へつれて歸ると無分別に進めば、いづれも爰は切り所ぢ  
 や、女郎の指は盆正月勤むる男にさへ切るもあり、いうても是は小指一つに千兩あまり  
 入用出して、借錢まで濟まして一生の苦患のがる事ぢや、殊には親方のため、是程の

太夫から二  
 疊敷云々  
 太夫より局  
 女郎に下る  
 こと

事又いつの世にかあるべし、是非に切れと、やりての衆が薄刃あてがへど、氣に入ら  
 ぬ男に連れられて、然も知らぬ國へ行きて大勢供連れて、乗物に乗ることいやぢやとい  
 へば、さりとは其根性で、ようもく太夫とは呼ばれさんす、淺ましや、事によつて  
 死ぬるもあるに、こなたには何事があつても、勤の指は切らせぬほどに、身に疵付けず  
 に女郎がなるものか、手柄に寂しう無いやう遊ばせ、太夫から二疊敷の住居、今まで幾  
 人か見た事、唐紙の模様は立田川が目立つものぢや、仁介さまに煙草吸付けて、ちと  
 上へござりませいと、直に言やる顔を見るやうなと、儲も酷い事を遣手の衆がいひま  
 する、私も新屋の金太夫といはれしもの、好いた男ならば、命が何のをしかると、もた  
 れかよつて泣出だせば、大臣聞届けて、これはあちらこちらの詮議なりける、けふは口  
 舌を仕かけ、是非指を切らす心底にて來りしに、おもひ寄らぬ事を聞くは、何の日ぢやぞ、  
 我をたよりに語り掛るこそ因果なれ、此は見捨て難しと、まんまと一杯くうて、數なら  
 ねど拙者が居るぞ、氣悪い客をまき散らせと、頭から大きに出て、我ひとりして萬事を  
 勤めけるは、是大分のおはまりなり。此男も北濱に源といはれて、諸分ちうろくてん  
 にくより、あまり先繰を仕掛しに、又女郎はそれを所作にする帥ごかしにあはされ、儲



若代—若主人

ももろき身躰取集めて二百貫、やりての衆がおひ立てける。若い女郎に付けたき者はふるき遣手なり。町家の若代に家久しき手代あると同じ。此大臣にも良き手代あらば、是程までにはなるまじきを、出入の者も皆惡所にして鶏飯をふるまはれて、羽織借取にして歸るもあり、家請を頼みながら、疊の無心を申すもあり、喧嘩する祕傳書を預けて金子十圓無理借にするやら、寄る所さはる所にて取りひしがれ、財寶さらりと埒明けて、昔の風俗四五年に變りて、今は小谷といへる比丘尼寺の邊に裏屋住ひして、いかなく硯箱が一つあらばこそ。ちんからりにつけ釜掛けて、汁なしの飯を炊き、有る時は餅に日を暮し、無い時は帶締めて、三月大根も腹ふくるよたよりと、おのづから常精進の身となれり。此北鄰には觀音さまを負うて、勸進坊主すみしが、烏賊つくりて、わけぎ膾の薫、不斷鹽魚きらすといふ事なし。南鄰は三途川のお姥さまの勸進に歩行く男、ふる布子あまた拵へ置き、一夜を六文づつにて、貧家の嵐をしのぐ爲に貸して朝は片端から剥ぎて廻りて、目前に彼の世を見せける。かゝる所にも住み馴れて其氣になれるは、惣じて人間のならひぞかし。今は人置なかまの使して、妾奉公人の著替を持つて供するも口惜しからず。錢さへ取ればおろしたる胞までも捨てて行く。人の果こそ淺ましきも

内の様子を一此下に見るにの三字ありたし

のはなし。中々生きては何か効の無き事ながら、其身に成ては死なれぬものと見えたり。されども昔残りてさもしき心にて紙一枚、ちよろまかすといふ事なし。或夕暮にさかりを惜む藤見がへりに、今橋の現銀といふ大臣、わづかの春雨に逢ひて、軒傳ひして行くに、彼の男破傘さして、我を見懸け、此傘を御用に立つといふ志優しく、そのまゝ借りて見れば、越後町京屋五十本之内と書付をかしく、其男の歸る入口を覗けば、東窓の反古張皆々奉書の假名文、心をとめて見るに、疑もなく新屋の金太夫が書翰。さまふもたれたる文柄。お定りの奥の手、我等命はしばし貴様より借物と書く事、誰にても嬉しがる行方なり。何とやら可笑しく、押懸けて尋入り、内の様子を腰張も皆太夫が筆なれば、如何なる由縁ぞと昔を聞けば、何の用捨もなく、金太夫ゆゑに此仕合になりけると語りぬ。金太夫に我等わけあつて逢ひけるに、此君が文ども斯くさらし置くは由なしと、文反古残らず所望して、金子三兩取らせて立歸りける。此大臣も此男の如くに追付なるべき志なり。金太夫の文やら鬼の手形やら知らぬ裏貸屋なるにと笑ひぬ。



西鶴置土産

卷二 大目録

あたご嵐おろしの

袖そでさむし

人には棒振虫ぼうかりむし

同前どうぜんに思おもはれ

堺さかいの島長花紅葉たうちやうはなもみぢの遊

かべのくづれより小判珍めづらし

百ひゃくに成ても女郎ぢやうらうはこしつき

晝食ちゆうじきなしの道中だうちゆう

小家せうかも八朔はつしやくの繪え

金魚きんぎよが狂言きやうげんもふるし

江戸櫻えどざくらのかへり咲さき

男子おとこがひとつきるもの

朝顔あさがおの實みを取る姿有

御前おまへの戸とも茶ちやの木きとなり



うきは餅屋もちや

つらきは碓からうすふみ

新町の夜店知らずめ  
綿秋のたまりかね  
木半が身のうへ  
座敷踊に戀がまはる  
紋所はむかしを残す

一 愛宕嵐の袖さむし

京は山々近く、松の風も通ひて、冬空の氣色しぐれ間もなく、雪もおもしろ過ぐる程ふりぬ。黒木賣る聲も常よりは忙しく、今から日のくるゝ事は夢ぢや。寶船の打出の小槌も何も持たぬ者が打つては、いかなく茶屋狂ひするほどの銀も出ぬ世の中。無うてならぬものなれば遣ひ捨てぬうちに分別せよと、身に懲りたる人の異見も耳に入らず、皆無になし合點のゆく人、それは遅し。昔より女郎買のよい程を知らば、この躰までは成果てじ。ある時泉州堺の島長といへる大臣、はじめは野郎に遊び、毎日に忍び御座舟に、みねのござらしを乗せて、夷島の遊興、世の人のするほどの事爲盡して、いつの比よりか都の島原に通ひ、大坂屋の野風に吹きたてられ、次第にくだり舟、上りづめの女色男色、此二色に身をなし、財寶皆無になし、さすが名高き大臣のかすかなる身と成て、四季小紋のかさね小袖も大がはりして、千種色の木綿布子の身狭にして、借屋住居のあはれに、やうく手代どもがなさけ、上下三人の命をつなく上荷舟の貸賃を、一ヶ月四十五匁宛あてがはれて、是にて酔も味噌も茶も薪も萬事の朝夕を埒あけよる。あはれや世にあ

野風―傍訓  
やふうと音  
讀したるは  
誤にて、の  
かぜと讀む  
べき也



正五九月一  
此月々は忌  
月とて、昔  
より精進潔  
齋する風俗  
あり  
ひとへ二日  
一ひとひ二  
日の訛

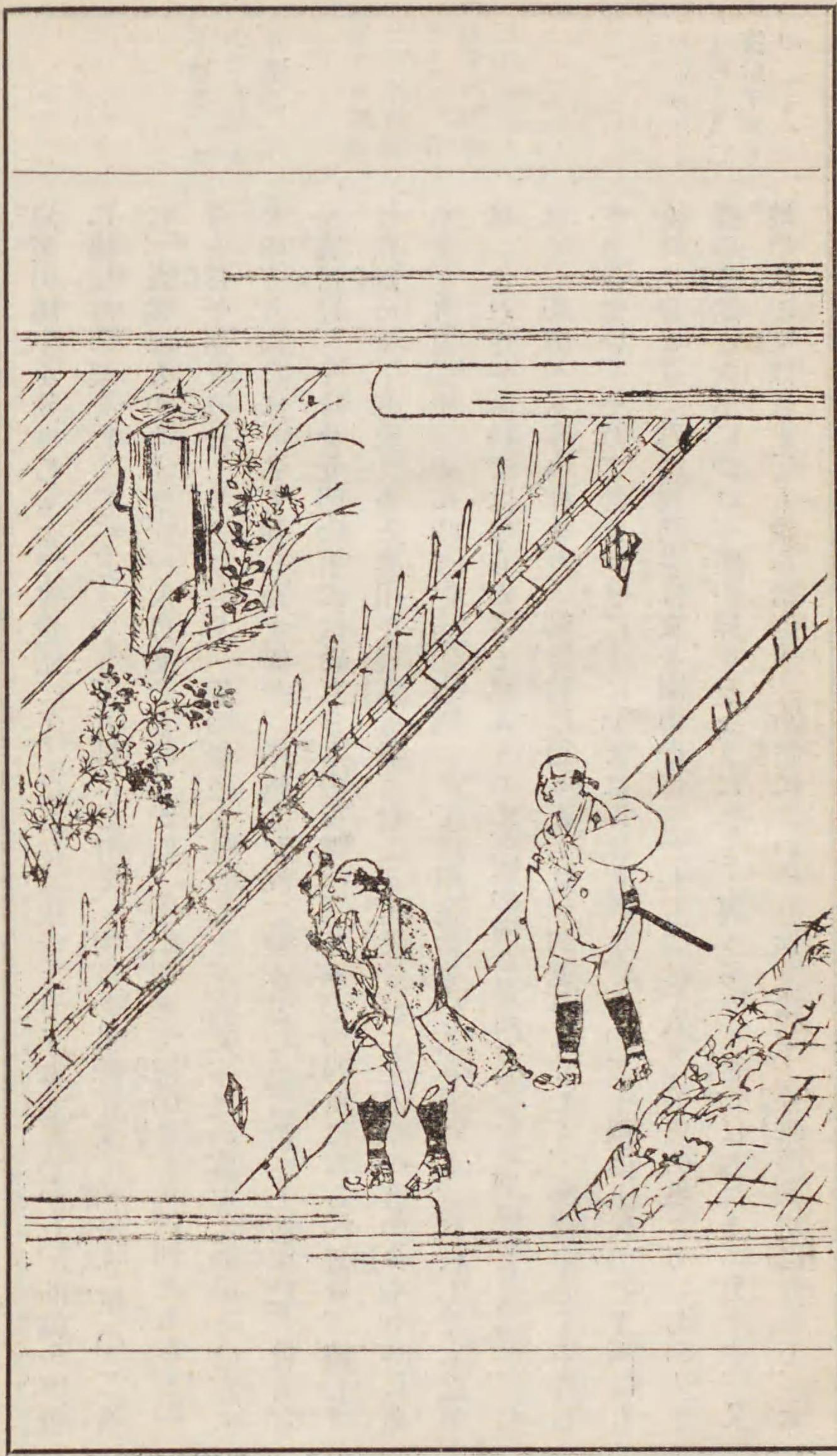
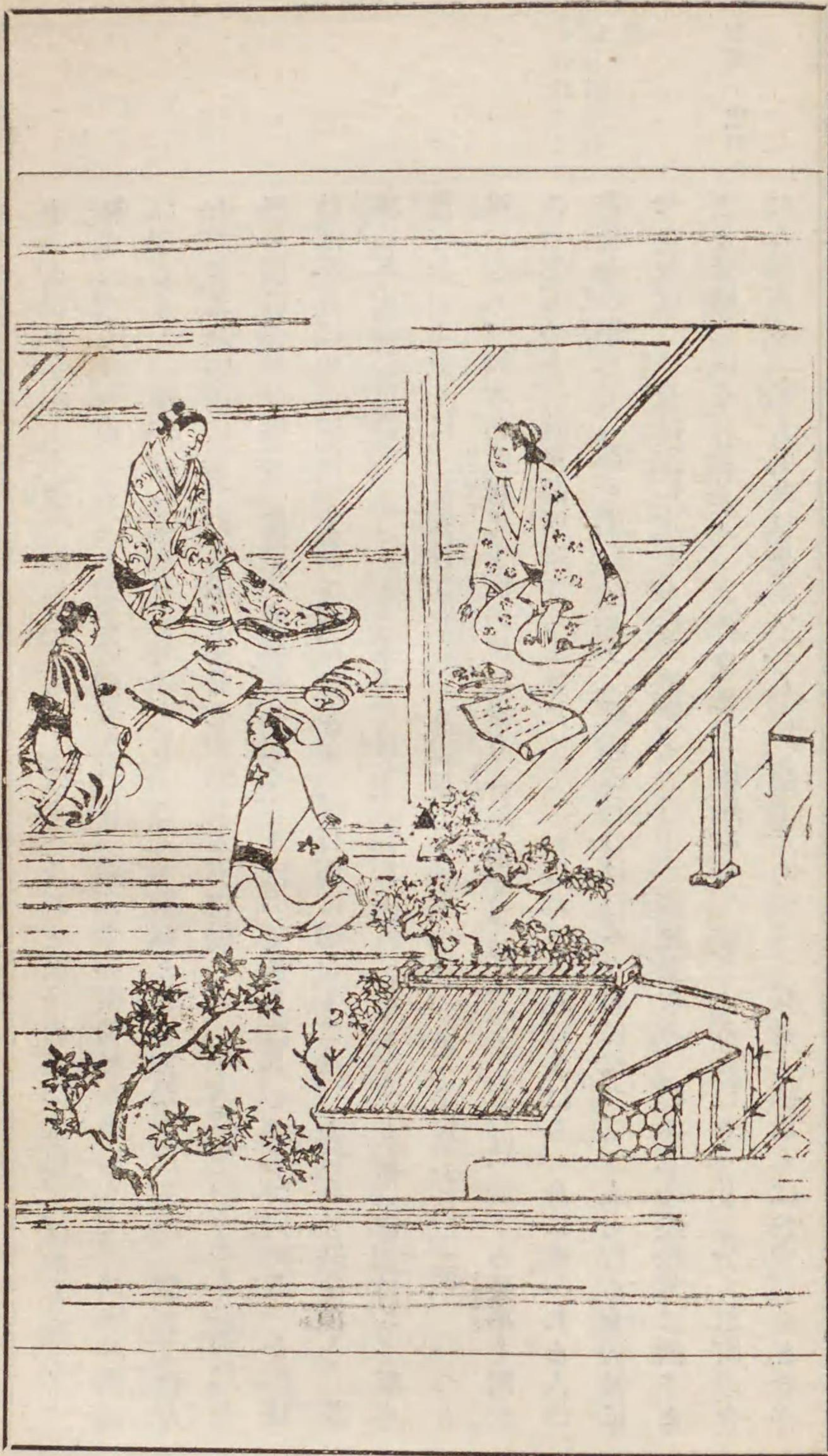
る時、悪所へつかはしたる文飛脚の通帳にしるせし其賃銀も一月には百目あまり出しけるに、生きながらかやうに成果つるは、我ひとりの様に思はれてくちをし。それも時世なれば、此浦にて引く網の磯藻まじりの小鯛、一籠わづか五文六文を直ぎりて、けふは祝ふ八朔なりと、手づから鱈にして、腹ふくるを樂むは、住める効なく思へど、其身になつて舌もくひ切りがたし。科きはまりて首刎ねらるるものも、其日の朝飯箸持つて喰ふは、人の命ほど惜きものはなし。此隠者も何祈るらん、正五九月とて二十四日に思ひ立ち、愛宕參詣と、ひとへ二日の旅用意。小者に風呂敷づつみ、其身もわらんづ穿けば、下女はつくづく此風俗を見て、あの鼻の高さにて何の願かある、天狗も旦那殿には恥ぢぬべし。又火の用心も財寶ある人こそ、此地藏を頼みてよけれ。留玉預かるとて、から長持一つ、自然の時は女の働きにて、のくる身躰、貧者無用の物まるりと思ひながら、主命なれば機嫌よく門おくりして立別れぬ。此大臣昔はかりそめの京のほりにも、堺より六枚肩の夜駕籠、一人七匁に定まつて、四十二匁出せば、中を飛ばして、まだ夜深きに淀の小橋のつめなる偽の仁兵衛が所まで、島原よりのむかひ提灯を出させ、水車のごとくまはらせし事もとうち詠めて、それが門をばすこし足ばやに編笠前さがりにかつき、

しつこうせ  
ずあつさ  
り遊ぶ

ひげらかし  
もの一人に  
誇示するも  
の

鳥羽の馬牛を除けるもよほど世話にて、ほどなく東寺より千本通にわかれ、曲輪の堀越に揚屋町の裏を行くに、どういうても都ほど有て、物日の出懸け姿、柏屋丸屋の二階に、衣裳はとかく赤きが一入目立つものぞかし。小唄聞えて撥の音、是は何ともならぬ今一度千兩ぎりにしつこうせず、爰の氣色を見たしと、八文字屋の裏なる壁のこぼれよりのぞきぬれば、名も知らぬ女郎が、座敷はなれて涼みどころに拵へし置床に、枕もなぐ寝轉び、今時分女郎の手には珍しき本の小判を、五兩づつ四所にならべ置き、嬉しうに詠めて、知れてある算用を幾度も數よむこそ可笑けれ。是は京の客の金やり時にあらず、九月二十日過に時づけ届の小判、さては田舎の素い人なるべし。何にしても此里は、あれをやらいではならぬ所と思ふうちに、宿の唄がひねり文に五兩ばかり持添へ、わたくしの方へも半九様より、御書翰に預りました、御返事に宜しく、御禮申してやらしかけあひます、殊に北國衆は文を國のひげらかしものに、人丸、貫之の筆より、おのく様の書捨を大事にかけ、紙の損ずるをうたてく、裏うちして巻物にしたまふとかや、又地の衆の文は皆までも讀み給はず、小宿にかいやり捨て給ひ、挽碓の敷紙になりて、太







夫さまの御名を、小麥の粉に汚すもよしなし、それと又今の京の大臣位ばかり取つて、  
 勝手になりませぬ、とても勤めの御身なれば、殿ぶりの御物好やめにして、たとへ物言  
 ひ悪しく、一座初心にござりませうとも、こんな御状まるる方が大臣なり、惣じて帥が  
 女郎さま方の役に立たぬもの、随分しやれたる男自慢の人、京大坂堺にもあまたあれど、  
 無分別につかひ捨て、揚屋の手前も味悪く、まはつて通るは其心からの白痴者、女郎狂  
 ひばかりに片づけば、末長う遊ばれしを、又野郎に戀をまたけ、あたら身躰を潰し、若  
 盛にあてがひ世帯、うごくゝと生きて居て、何か面白い事あると、我を見付けて、斯く  
 當言をいふやうに、是天性なりと、身震ひして立ちのき、彼の内儀がいふ所、一つも  
 違ひなし、橋本の渡越えて松の尾に掛り、實の道筋を愛宕へまるれば、かゝる憂事も聞か  
 ざりしものを、此里餘所ながらも見たくて、いはれざる京にまはり、身に應へたる人の  
 言葉を合點して、都も面白からず、嵯峨に行けばはや夕暮になつて、人とむる女の袖に  
 たよれば、一夜は爰に定めしに、筆屋といひて、廣座敷なり。折ふしの焼松茸に酒さま  
 ざま饗應しける。女もふつゝかに見えず、機嫌取りて立ちふるまひも、どこやらお町めき  
 たる所あり。然も其女は年まへなるが、廓下走りやう、只者とはおもはれず。くどき寄  
 京―無用の  
 いはれざる  
 京  
 お町―色町

りて昔を語れば、申さぬ事か島原の座持女郎、土佐といへる流なり。いづれ移り香常な  
 らず、物まるりの精進をうち破りて、木綿寢道具にわびながら、太夫に逢ふ心地して、  
 又下向にもたはぶれ、御初穂の残りをありぎりを取らせ、山崎よりの舟賃なくてひろひ草  
 靴の歩行路、中食無しに歸りぬ。是ほど懲りて此身になつても、やまぬものは好色と逢  
 ふ人ごとに語りし。

二 人には棒振蟲同前に思はれ

上野の櫻返咲して折ふしの寂しきに、是は春の心して、見に行く人袖の寒風をいとはず、  
 何ぞといへば、人の山靜なるお江戸の時めきける。黒門より池の端を歩むに、しんちう  
 屋の市右衛門とて隠れもなき金魚、銀魚を賣るものあり。庭には生舟七八十もならべて、  
 溜水清く、浮藻をくれなる潜りて、三つ尾働き、詠なり。中にも尺にあまりて鱗の照り  
 たるを金子五兩、七兩に買求めて行くを見て、又遠國にない事なり。是なん大名の若子  
 さまの御慰になるぞかし。何事も見た事なくては、嘶にもなりがたし。兎角人の心も、武  
 藏野なれば、ひろしと沙汰する所へ、田夫なる男の、小き手玉の掬網に小桶を持添へ、



此宿に來りぬ。何ぞと見れば棒振蟲、是金魚のゑばみなるが、一日仕事に取集めて、やうやう錢二十五文に賣りて、又明日持つて參るべしと、下男どもに輕薄言ひて歸る。又是を見れば、爰も悲しく世をおくれる人ありと、物かなしけに其者を見れば、是はく伊勢町の月夜の利左衛門といへる大臣、我家を立退き、何國に暮せしとも知らざりしに、さりとは見にくい姿にはなりぬ。何れも昔語りし友達中間に汝を慕ふ事大方ならず、知らぬ事とて、それよりの年月、かく淺ましく暮させし事は是非なし、此後は我々うけとり、貧樂に世を渡すべしと言ひけるに、まだ此身になりても、過ぎにし贅やますして、女郎買の行末かくなれる習なれば、さのみ恥しき事にもあらず、いかなくおのくの御合力は受けまじ、利左ほどの者なれども、其時にしたがひて、惡所の友の好誼に、けふを送るといはれんも口惜し、面々のこころざしは千盃なり、久しぶりに逢ふ事、又重ねて出合ふこともあるまじ、一盃の茶碗酒、しばしの樂みなるべしと先立つて出、茶屋に腰を掛けて、是きりと彼二十五文を投げ出しぬ。然も此錢は宿なる妻子の夕をいそぎ、鍋あらうて待ちけるに、すこしも怯けぬ心根、皆々涙に袖口をひたし、時雨も知れぬ空なれば、いざ其方の侘住居に行きて萬を語りながら、酒を飲むならば、ひとしほ慰みにもなりぬ

べし、今の内儀は定めて吉州とよい中といへば、此女郎のゑにこそ、かくはなりぬ、傾城も實のある時あらはれて、四年あとより男子をまふけ、父様かゝ様といふをたよりに、けふまでは暮しけると、夢の如く語るを、うつとのやうに聞きて、谷中の入相比に、吳竹のざはつき、とまり雀の命も、あしたを知らぬ餌指町の東のはづれに著きぬ。此裏にかすかなるすまる、三人ながらはひり給はば、なか／＼腰の掛け所もあるまじ、それもよし何かつとむべしと、案内して行くに、蘆垣に秋を過ぎたる朝顔の、末葉もかれくになりける蔓を搜し、七十餘の婆の、其實を一つ／＼取て、又來年の詠を慕ひける。されば人間は露の命ともいふに、此老人はと、顔がながめられて、婆さまこゝを通りますと、有躰の禮義を陳べて、埋井の端越ゆるも危く、かけほしの煙草の、引きはへたる細繩の下行くほどに、窓より親の面影を見て、父様の錢持つてもどらしやつたと、いふ聲も不便なり。内儀は昔の目賢く、同道せし人々を見しより、お三人の中にも、伊豆屋吉郎兵衛さまはへ入らせ給ふまじ、残る御兩人は苦しからずといふ。あるじをはじめ、おのおの不思議を立て、如何にして彼ばかりを咎め給へるぞといへば、是非なきは勤の身、彼方には只一度假なる枕物語せし事、今以て心に掛りぬ、主に祕すことも由なしと、玉



なる涙を溢しぬ。聞くに理をせめていたはしく、亭主も誠なるを満足して、女郎の身はそのはずの者なるに、是はやさしきことわりと、時に胸を晴し、是は我等が客なりと三人ともに内へ招き、先づお茶といふに薪なく、釣佛棚の扉はづれてありけるを幸に菜刀にて打割り、間を合せけるもかしこし。扱御祕藏の男子はといへば、十四五色も繼ぎあつめたる蒲團にまきて、裸身の肩をすくめて、嵐をいとふ風情を見て、殊更にあはれなり。さむいにははといへば、内儀打笑ひて著物は捨てて、彼のごとくかよと無理なる口説といひも果てぬに、大溝へはまつたれば、裸になされて寒い、著物が干上つたれば、著たいと泣きける。主も女も随分心強かりしが、今は前後を覚えず涙になりぬ。いづれもしばしは物もいはれず、扱は彼子が一つ著物かはりもなくてや、親の身として子を悲まざるはなかりしに、よくよく不自由なればこそ、斯る憂目を見するなれ。何語るべきも歎さきだち、おのくゝ販る時、三人ながらさよやきて、持合せたる少金を取集めて、一步三十八、こまがね七十目ばかり、たちざまに天目に入れて、是とはことわりなしに出だせしが、亭主も送りて出しが、さらばくと夕暮深き道を急ぎしに、又跡より彼金銀を持ちて追懸け、是はどうした仕方、神ぞく筋なき金を貰ふべき子細なしと、

天目一茶碗

薄雲若山一學一此三人の客の相方なり

人のことわりも肯かず、なけ捨てて立歸りぬ。是非なく取つて戻り、それより二三日過ぎて、色品變へて、内儀の方へ持たせ遣はしけるに、はや其人は在郷へ立退き、空家となりぬ。色々穿鑿すれども、其行方知れず。三人共に之を歎き、おもへば女郎狂ひもまよひの種と、言合せてやめける。世は定めなし、異なる事がさはりとなりて、其比の薄雲、若山、一學、三人の女郎の大分損といひ終りぬ。

三 憂きは餅屋つらきは碓ふみ

諸色も其道に入らざれば、善惡の分をしらず。河州高安の山本近き里人に、親の代より木綿賣りける銀子を貯めて、かためて見ば、一番牛の寝たほど譲り渡しぬ。如何やうにつかへばとて、一代には耗ることあるまじ。然も深入をせず、上町者の妾狂ひ、三十日に米一斗五升、六疊敷二匁の屋賃してやる分にて、是よりはと浮世を樂みける。ある時京より西國に屋形奉公勤めて親許へ歸る。其時の人置大坂に来て、藏屋敷より請取りけるを、庄屋宿より聞出し、一年銀五枚にきはめて、白髪町觀音堂のほとりに借座敷して年がまへなる婆ひとりつけて、不斷は露路の戸を閉めて、表に貧なる塗師細工せし人



横目—監督

悋氣深き山  
云々—悋氣  
に木をかけ  
たり

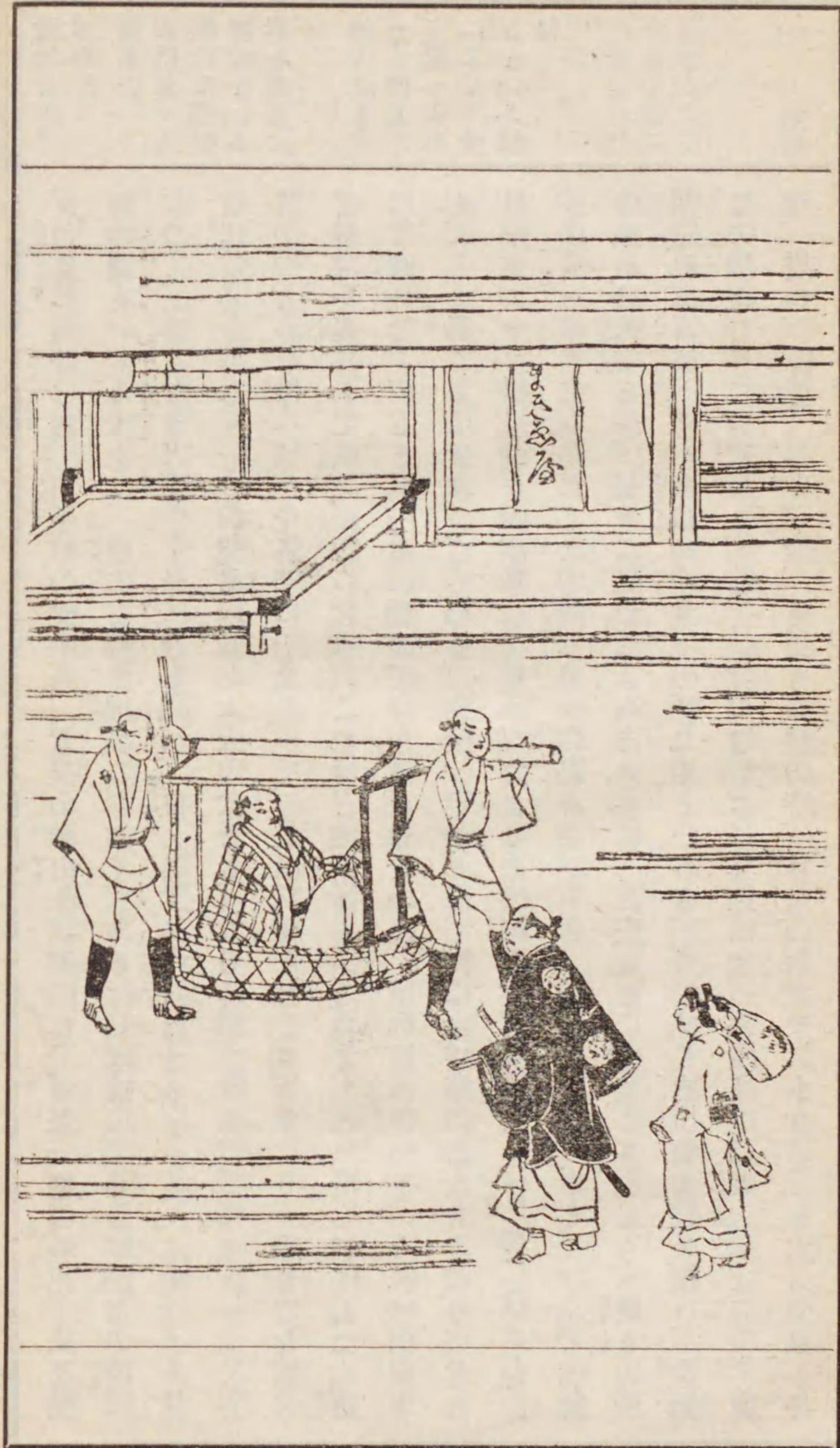
風呂屋—風  
呂屋女とい  
ふ一種の遊  
女を抱へお  
く茶屋  
綿秋云々—  
河内は綿の

に、折々心付して此妾の横目を頼み、外より男の出入は堅く吟味して、京より見舞に下られし親仁も、飯はふるまひて、夜は脇宿を取らせ、寂しなくさみに飼ひける三毛も、男猫を見つけ、之さへ餘所へもらかしける。さりとは悋氣深き山のねきの大、所の物頭もすれば、すこしは小百姓のおもふ所を忍び、又は公用を晝はつとめて、夕方より四里ある所を早駕籠にて、毎夜新町東の門より西へ行抜け通ひ、なか／＼夜店の灯も目に暗く、明暮三歳餘り身を運びしを、露路口の塗師屋が此事人に語りて、遠い所を通ひ来るひまあらば、女郎狂ひをせぬもをかし、然も新町筋を越えて、妾に大分の金銀を入れける白痴もありと、一節切の指南する長崎勘十郎といへるあそび宿へ、大勢若き者集りて、此話に大笑して、其金持の百姓めを、何卒本色町へはめたし、我々はなればこそ、おもしろからぬ茶屋、風呂屋、思ふ様にならぬ世の中、又今年も良き綿秋なれば、其庄屋が取込む銀欲しや、いかな／＼身には付けじ、木村屋の小太夫を、せめて三十日、天神のやまとを付けて買ひたしといふ。此物好悪しからずと、其座に八木屋霧山にあへる木半といへる大臣進み出て、さりととは其男は、女郎の泰なるたのしみ知らず、長門の萩の鹽道といへる法師は、歌仙を請出して宿の花に詠め、若衆は松島半彌

産地として  
名あり  
鹽といへる  
大臣云々—  
鹽にて淵を  
埋むといふ  
諺を應用せ  
り  
佛もなき云  
云—佛もな  
き堂へまゐ  
によりし造  
るといふ諺  
句

が色盛に遊びける、白子町の播磨は、太夫の瀬山を我物にして、是一生の榮花、又尼崎町の鹽といへる大臣は、銀にて淵を埋めるが如く、あるほどは捨てて其後は浮世の隙になつて、佛もなき天満の堂島に身を隠れ、自ら寂しく、鼓謠の拍子を教へ、やう／＼碁會にけふを暮し、一つの樂みにせし太夫の金吾も、此男に戀が餘りて、出家になりぬ、昔のつとめを憶へば、今各別に引きかへて、是は殊勝なるをさまりなり、惣じて女郎ほど義理を表にして情を心底に含み、これほど面白きものは無きは、惜しきはあたら銀にて磯狂ひ、何とぞ其庄屋に勧めて沖を泳がせといふ。塗師屋頭掉つて、それは何程申しても、動くものではござらぬと、物堅う申せしが、物には時節のあるものなり。其七月の末より、揚屋々々の座敷踊を始め、町より人の嫁子も、忍び／＼に見物に行きしに、彼の妾ものも之を見たとの願、中々合點をせざりき。頼にことわり申し、けふで仕舞の扇屋の大寄とや、是非に見せたまへといへば、此庄屋心には染まざれども、度々の所望なれば耳姦しく、西口の香具屋の新九郎といへる、このほど取出の太鼓を頼み、塗師屋の噂まじりに、おの／＼引連れ見物に出しに、其比はまづ佐渡島屋に太夫揃、たかま、奥州、揚卷、葛城、吾妻、紫、吉田も振袖の時、新屋の金太夫、小女房でも太夫めき、丹







かこい遊  
女の階級に  
て天神につ  
ぐ

波屋の小薩摩がすらりとしたも見よく、井筒只美しく、小琴がにがりの走りたるも、一子細有てよし。明石屋の唐土、吉野、住吉屋の瀬川が鼻の先も、悪うは高からず。堺屋の君川がぬるきも、常の女郎の賢きに勝り、又七が初瀬も大和の大臣が奢らせ、二十四人の太夫十九人まで一つに集り、此外天神かこい、店の聲ある女郎ならべて百三十二人、皆紫の帽子、揃うたりや手拍子腰つきに氣を取られ、蹴返し、刎袂引足のうるはしく、中の腰掛には役者、末社、浮氣大臣、これ面白き事、天竺にもあるべきか。日の暮れ行くを惜む折ふし、伏見屋の端局に、勝之丞とて一匁取の女郎が、踊装束して人のうしろより来て、大勢の中を押分けく、入て、彼の庄屋が左の手を、何心もなくしめて其處をあけて、中へ通したまへと、ひたくと身添ひける。此男魂なく、力にまかせ四邊をつき退け、此女郎を踊らせけるが、是ぞ戀のはじめとなつて石疊のゆかた忘れず、我が前まはるたびく譽めて、踊果つれば妾は先へ歸し、太鼓の新九郎を頼み、俄になづみ出し、是を女郎の買ひはじめ。此意氣地、疾く知らざるは無念と、妾は其まゝ暇出だして、貸家は三十日切の思出、釜の下の塵も灰も無いやうにしまうて、毎日に騒ぎて、いつの比よりか、太夫の越前に大飛して、霧山に逢へる木半にも一座して遊興。是でこそと互

に言合せて、二歳あまりにすつきりと無いが定なり。世は様々にかはるかな、其霧山は請けられずして行くへ知れず。越前は病死して、此二人の太夫昔のやうに成て、木半といふ大臣は次第にみにくう成て、世わたり色々にかはりて、後は茶碗焼出す高原といふ所に、猿まはしと相住して、其身はわたざねの油屋に通ひ、かなからうすを踏みて、足手のだるき身にも、扇屋長門と口説をせし高嘶、今は無用のいたりなり。又河内の庄屋大臣は持ちつたへたる野山竹木まで賣りて、己が里住居もなりがたく、一家散々に立別れ、在郷の道筋は忘れず、玉造の末なる中道といふ橋の詰にて、すこしの餅屋をせしが、店に掛けたる暖簾の紋に、梅鉢をつけしは越前が定紋、さてもしやらくさし。



西鶴置土産

卷三 大録

おもはせすがた

今は土人形

子が親の勘當

さかさま川を泳ぐ

毎日の芝居すき  
 女ぎらひとは云過し  
 今見る物は小むらさき  
 太夫ひとつの掛銭  
 すき腹のかぶつぶし  
 茶屋にきとやうの紋  
 女郎に男草履取  
 あつかひは千五百兩  
 手かけが本妻のりんき  
 江戸に鯉のさしみ賣



算用さんようして見れば

一年二百貫目つかひ

南都なんどもろはくおろし  
美食びしょくはからし酢すの鱧かま  
小野島おのじまはわが物に  
生れうまくの具足の著初そめ  
明神も御存知の宮参り

一 思はせ姿今は土人形つちにんぎやう

御異見度々尻こいけんたびくに聞せて、野郎狂ひのやむ事なく、明暮四條河原に通ひけるに、道橋の再さい再崩れけるは、此大臣の召連れられし血氣盛なる末社役者、あられなく渡りぬる故なりと、此處うけたまはりの菱屋六左衛門が穿鑿仕出しぬ。今の都のおごり男、然も風俗勝れて、見ぬ世の中將、中古の三左、當代の四六と、是を知ぬもなく、毎日の道中なるを、石垣の遊女ども飯喰ひさして走り出、此面影を見れば水茶屋の娘ども、天目手てんもくから落ちて、我が商賣を忘れし。東山の櫻も日々には見られぬぢやが、たとへばあの男生きた如來さまにもせよ、ようもく眼が續く事ぢや、追付目病おひきめの地藏へ七日參詣まゐりをするであらう、何の錢一文にもならぬ大臣、彼よりは芝居見の出家衆に氣を取り、札一枚讀込みても三文徳がある、むつかしい事ではなし、笑うて見せても物になる事と、名々の母親または主人のしかるを聞けば道理ぞかし。是等はよき所に住馴れて、諸人の色ある男を見るさへ戀をふくみぬ。まして地女房ぢにょぼうは一巾帯いちんたいの腰を抜かしける。たまく男と生れ出て、是は備つての果報なり。殊更親は後家にて銀持かねもちで寺まるりすきにて、世界は我儘といふ

見ぬ世の中  
將云々一在  
原業平名古  
屋三左衛門  
氣を取り  
機嫌をとる



あまがへる  
の芝居―雨  
蛙の家とい  
ふべき程の  
小さき小屋

年が薬―諺

よれ―遊女

大臣なり。人に借らずに有るにまかせて、此川原に於て水の流るゝ如く、よきもの取らされければ、惣じての太夫元木戸の者、あまがへるの芝居なる小見世物の猿までも、御顔を見知つて烏帽子を脱ぎぬ。此所を是程までしこなしけるは、一歳に千兩とは算られける。是ちがひあるまじ。一日に金子百兩まき散しても、誰か驚く者なく、お伊勢様へ十二灯あけたる様な所、さのみ嬉しがる者もなし。此大臣さりとては女嫌ひ、つひに島原の景色遠目にも見ざりけり。されども物には時節あり。野郎ぐるひの異見しつめられて、是非なくやめ分の誓紙を書けば、諸神の手前を恥ぢて、其後は芝居をのぞきもせざりき。扱は年が薬とおのゝ喜びけるに、又女郎狂ひに身をなし、明暮今の唐土に出掛けて、是を留所はなかりし。人又無用と身のためを申せば、我等此里へ通ひまじとの誓紙は致さずと、わる賢き事に理窟をいへば、後には誰か咎める人なくて、心のまよに騒ぎて此町も面白からず、名に聞きし武藏野の色深き濃紫を見に下りけるに、江戸にもきかぬ氣の男、三木とやらが根から引抜きて、其行くへ知れざりき。今少し晚くこのよねを見ざる事の口惜し。せめて其紫に面影の似たるものかな、遙々爰に下りし効にと穿鑿するに、是ぞといふ女郎もなく、見ぬ戀するといふはむかし、今の世にはなき事なるに、人の物になり

おかた―妻  
君

けると聞けば殊にゆかし、夢にも其姿を見て京の物語にもと、人だのみして尋ねけるに、さりとては知れざりけり。ある時淺草の寺町の横筋を行くに、内の見えすく蘆簾住み荒れたる宿の棚に、濃紫姿屋の看板出して、土人形の細工する男を見れば、京にて立役勤めし嵐三郎四郎が、白無垢の上に破紙子、身を窶し藝に出しよりは尙憎からず。いかさま子細者奴と立寄り、御亭主此人形は濃紫ならば、まづ遊女にしては帯が狭し、殊に後のとりなりまんざら人のおかためきたるといへば、いる氣ならば取つてござれ、一文につづつ賣るものを無理なる御吟味。それは七十四匁に賣る時の詮議と笑ひける。何とやらゆかし、されば此女郎を其直段に年のおくまで買ひ續けに、京より下りたる男といへば、扱はよいものは都までも知るゝ事かな、我等も此女郎に思ひを掛け、此三歳あまりも焦れしに、つとめ女の事なれば、状文になくも愚なれば、とかく銀ためて只ひとつ買うて、年月のおもひを晴さんと、此細きうちより毎日三文つつ掛錢をして、二年餘りにやうく七十四匁になして、ひとへ二日のうちに便を求め、借著も人の情、揚屋定めてもよほしけるうちに、つい請出されて、扱も無念々と男泣にして語る。戀は是なるべしと哀さに、扱其濃紫が行くへはといへば、さらば京の人に今の様子を見せんと立行







一角一歩  
土人形の水  
遊一土佛の  
水遊といふ  
諺に據る

く方は、唐物町の横町に柵も目に立たぬほどのうちに、昔の残りたる女の見えしが、彼が三浦の濃紫とや。今は其名も變へてお梅とよびける。人の女房になつて何か戀のあるべし、やれ思ひ切れ、外にも戀はあるものと、男を友として物の見事に三野に通ひ、今の高尾薄雲に手を揃へて、髭の長兵衛が座敷を我物にして、京より持參の三千兩、いかなく一角も残らず遣ひあけて、又彼男と相住して、せめては女郎が踏んだる土を身過の種と、揚屋町の眞砂を金龍山の眞土にまぜて、今は薄雲高尾が姿をつくりて、土人形の水あそび、次第に淋しくなつて、大方は火をたかぬ日も見えしが、是にも腹の用捨なくつれ節のかはり加賀、罪もなく銀もなく世の人に恐れもなく、外の事なく外ませず、よね狂ひの意氣地を語りて、埒のあきたる一人がしまひ、未だ三十より内にして一代の榮花、是からさきの老の入りまへ何とかなるべし。此四六大臣京都の大分の跡は、母にさへ見限られて他人ものになしけるとかや。

二 子が親の勘當逆川を泳ぐ

かはつた事を聞きました、兎角宿に居るが悪い、爰に出懸けたればこそ可笑けれ。揚屋

おか様—お  
かみ様

古文眞寶—  
四角ばり小  
むつかしき  
ことをいふ

町の入口の茶屋に、桔梗屋といへる方の女房は分別の萬とて、太夫八橋、夕霧に付きし遣手の開山なるが、時節あれば我世を経ておか様といはる事も樂みなり。此内に腰掛けながら、よね達の道中を見るに、いやと思ふはひとりもなし。是ぞまた動きが取れぬと、なづむほどなるもなし。今の世の女郎、心は洒落て位なし。昔の千歳、唐崎は禿遣手の外に、沓とて鬢切したる男草履取を連れける。是をおもふに全盛の時なるかなや。孔子臭い人までも朝に道を聞いて夕に通ひ馴れ、何の古文眞寶、されば人間死ぬといふ道具おとし、是に勝つ男達もなし。少しのうちも浮世のひまさへあらば、此美君を詠め參らせ、長命丸といふ藥なり。仙家の不老不死の妙薬取りにやるまでもなし。近道にこれ程よい事を知らざるや。扱最前のかはつた事の話の末は如何に。されば世に子が親に持て餘し、とても惡所狂ひの異見きき給はねば勘當を切るとは、前代例なき事。其親仁殿は伊勢町の大盃といへる大臣、酒より亂れて猩々の拔手切つて、足許の蹠跟く掛物を喜び、揚屋の物好は和泉屋半四郎が二階座敷よしと、山本長左衛門が抱の小玉水に深くあひ馴れて、内藏の寂しくなる事此二歳餘りなり。今また六十に過ぎて鬢付たしなみ、女郎と討死ときはめて銀遣ひけるを、其子は二十八になるまで、つひに揚屋疊を踏みし事もなく、七



死一倍親  
死せば元金  
を倍にして  
返すといふ  
約束

歳の時かき初に絹の禪買うて中橋の姨より送りたまはりしを、今に其一筋にて埒をあけ、世わたりの事のみ大事にかけ、わづかなるうけ酒、今では江戸にならびなき酒店となりしは、此一子が働きなるに、親に大分遣ひ果てられ、内證の續かぬ所をなけき、駒込の旦那寺念佛講中を頼み、息子がいふ處一つとして道理なり、世には不幸の子ども、親の死一倍といふ銀借る事は聞きしが、親の身として子を追出し一倍といふ銀を借り給ふは例無き仕方、向後色町やめたまへと、様々の御異見聞かず、いかなく、此道留りがたし、兩方思召してのおあつかひならば、只今金子千五百兩悴子が手前より貰うてたまはれ、彼の家を罷出、一生親子不通の手形と望めば、願の通にあつかひ濟まし、小判渡して親仁を追出しける。是等は廣き世界に又もあるまじきたはけなり。是を思ふに大傳馬町の綿店に、色すける亭主ありしに、然も此内儀美女なるに、外に又妾をこしらへしを内儀情にて、男の通へるも氣盡しと、我が宿に呼入れられしに、後には本妻を恪氣して色々に迷惑がらせ、程なく離縁せける。扱も珍しきあちらこちらの世の中や。其大盃といふ大臣のをさまりはと尋ねしに、千五百兩を手の物にしてすみ町のまんじ屋小薩摩を買ひしが、後先の思案なしに、いかなく、金子一兩も残さず。これほど見事にすりきる

因果は皿の  
ふち―因果  
のめぐりく  
るをいふ諺  
此無事―此  
の如く健康  
神を祈るを  
かし―祈る  
もをかしの  
脱文か

事たぐひなし。今見れば麴町の六丁目の横町に哀れなる借店して、鯉の刺身を作りて盛賣に廻りぬ。因果は皿のふちと人の笑ふも構はず、色里の文どもを庖丁の包紙にして見せけるも、此身にも贅をやめざる親仁、未だ心残りには三浦の花紫に逢はで果つべき事の口惜し、是非此思入一生のうちにあだにはなさじ、我等は此無事なればまだ三十年などは、たとへ不養生をしても長生を覺えあり、悴は追付女房を持つと三年五年のうちに、命勝負見え透きたり、子のもものは親のものなれば、此あとを丸取にして、再び花紫の願なり、とてもものに一日も早く息子奴にたくましき嫁を授けたまはれと、無理に結の神を祈るをかし。此諸願成就の日もあるべきか。

三 算用して見れば一年二百貫目づかひ

商賣の店つきよきは、酒質を取りて南都東大寺門前に住みて、仙人坊と異名呼びて隠れもなき大じん、我里の木辻鳴川にはまりて、世を夢より夢に暮し、何時夜の明くるも知らず、算用なしにつかひけるに、此所は女郎の高下もなく、十五匁にきはめ置きしは、申せば軽い事ながら、是にも奢ればはかの行くものぞかし。此男島原も新町も見ずして所



土佛の水遊  
一 諺

遊の五歳あまり、何か勘定になる事もなく、宵に酒呑みて夜更けて女郎と同じ枕に寝て、張合も詰開も敵に嬉しがらす事もなく、銀に賣る身なれば是非もなき勤と、いづれの女郎にも疎まれ、可笑しからぬ遊興に土佛の水あそび、いつとなく身を崩して高十五匁の女郎に、有銀七百貫目遣へば遣ふものかなと、内證知つた人あつて我を折りける。毎日此里の娼を残らず買揚けてから、十五女郎十八人、やうく二百七十目、店の女郎一匁から二匁まで九十七人、惣高合銀五百目にて一日買へば、年中を百八十貫目にてしまはるゝ事なるに、此大臣の銀つもり一年に二百貫目餘宛は何として遣ひけるぞと、團扇屋權七といふ太鼓持が何の役にも立たぬ不思議。是に身を染むる帥ほどにも無い奴かな。色里に銀のすたるは其算用とは各別のちがひあり。惣じての人の世帯に飯米よりは小遣の要るに同じ。女郎狂ひも揚錢よりは外の物費数々なり。靈地の佛前に石燈籠を立て、神前に水鉢を切据ゑて、名を記し置くは末々までも残る世語。傾城ぐるひに金銀入れても名の残しやうなければ、一萬貫目遣へばとて人の知る事にはあらず。此仙人坊も世の忙しからぬ時を得て、奈良より忍び駕籠を續けて、女郎一度に十人ばかりも連れて京に上る事、幾度といふ限もなく、世間に知れぬ大さわぎ。一道中にも百兩にてはとま

約  
こみち一節

り難し。同じ春日の里にも黒米の打込茶を飲み、病中の願に鱧の刺身を食うて死にたいと思ふ心、又は大坂の勸進能に雇はれて、地謠の歸りさまに鹽買うて行くなど、こんなこみちなる所を見ては、一日もながく暮さるゝ所とはおもはれず。奈良も亦奈良によるべし。かゝる大臣もあれば、いづれいにしへの都の人心ぞかし。仙人坊次第にあるほどは皆無になして、財寶も残らず、昔の名残には請出して寵愛せし小野鳥といふ女郎ひとりならでは、召使の者もなく、其後は元興寺の東町に身を隠し、今日を暮するたためとて燈心を引て、細き世を送りしに、小野鳥も是を見捨てず、昔の形をやめて繼帯の襷に、古風呂敷を前垂に直し、下司の手業いつからもなるものぞかし。琴三味線を弾きし指に石臼の挽木もついて廻り、さりとは悲しき世渡、折節に煙を立てぬ日もありける。是を少しも歎かず、男を大切にしてい其心を背かず、今に此男日に三度の酒を飲まぬといふ事ならず、其時々々につけ徳利を提げ、一度に六文宛が酒、此女郎買ひに行くを見し人、誹をやめて涙を溢さぬはなかりき。かく月日を重ねしうちに、このまぬ戀種とまりて、産月近づきしに、いかにしても其用意もならず。さあ今ぞとしきりは來れども取上げ婆の約束もなく、腰を抱いたり湯湧したり、まんまと一人して萬事の埒をあけて







見るに、初聲はつこゑの揚げやうから賢かしこさうなる男子なんしなれば、夫婦ふうふ喜ぶ事限なく末の頼みを掛けける。人の仕合は定めがたし。此子一兩年あとに生れ出なば、抱守だきもりつきんを奇麗に小袖の錦にしんを翻ひるがへし、宮參詣みやまきりなどいかめしくあるべきを、今の身となる宿に生れ来て、更めての産衣うぶぎは思ひも寄らず、肌はだには紙子切かみぎ々なるを繼集つぎめ、上うへには神祭かみまつりに拵かまへし子ども細工の具足を著せ、未だ忌いまもあかぬに鎧よろいの著初きつめをかし。今は世上に恥づる事もなく、其子を肩かた車ぐるまに載せて、春日の社に参りける。明神も彼かれが全盛の時を御存じなれば、嗚々不便に思召めがねすらんと、顔見知る八百八禰宜ぬい、是はくんと手を拍たたつも構はず、おもはく女郎が胎内たいないより出し若君と、具足の草摺くさずりを揚げて、各に指似さしごとを見せてむすこを知らせて歸る。猶又小野島此男を見捨てずして、請出こたされし恩のほどを忘れざる名女めいぢよ。萬人憐愍あはれみかけて後は二人ともに發心はつしんして、秋志野あきしのの里の片陰かたかげに住めり。

八百八禰宜  
—春日は八  
百八禰宜あ  
りといふ  
しど—小兒  
の陰

西鶴置土産

卷四 大目録

江戸の小主水と

京の唐土と

年越の伊勢参  
わらやの琴

金龍山の仕出し茶や  
女郎たがひに預り男  
青木屋の小藤にかよる時  
人はしれぬ仕合  
煙のすゑのたばこ入  
玉の盃當座に割り  
うつくしき物金太夫  
五條の市が物好  
長崎の鹿の聲  
よし野は生きた花



戀風は米のあがり  
つばねにさがり有

店にし のび 駕籠  
三日の日和見たし  
椀久わらひし人も  
揚屋が中つもり  
大盡もかはる世や

一 江戸の小主水と京の唐土と

御町一色町

關東の奥に今でも米一石につき十八匁する所あり。其處にも朝夕送り兼ねての乞食もあり。お江戸に住みても身の一代に小判といふもの手に持った事の無い者あり。又一日に五兩づつ悪所づかひして、命を六十五歳に算り、我から二十八代は事を缺かずと、御町を我内にして、親の日ばかり宿に戻る人もあり。無用の身躰自慢算用違ひになつて、追付摺切にならるゝ事疑なし。昔と變り人皆世智賢くなつて、今ほど銀の儲けにくい事はなし。近き比金龍山の茶屋に、壹人五分づつの奈良茶を仕出しけるに、器物の奇麗さ色色調へ、さりととは末々のものゝ勝手の好き事となり、中々上方にも斯る自由なかりき。ただ是よりは清水町のかくし娼、百で酒肴もてなし様々なるも可笑し。又深川八幡の茶屋者は、本所築地よりは各別見好けに、京の祇園町のしかけ程ありて、鳥居の内は二人一歩、外は三人一歩と極め置きしも物堅し。江戸には女のすくなき所かと思へば、行く先の名所あり。三野はむつかしき女郎ばかりかとおもへば、新町川岸の柿暖簾の分は、銀では一匁、錢で遣れば百に定めける。是も女郎の意氣地は更にかはる事なし。湯具も

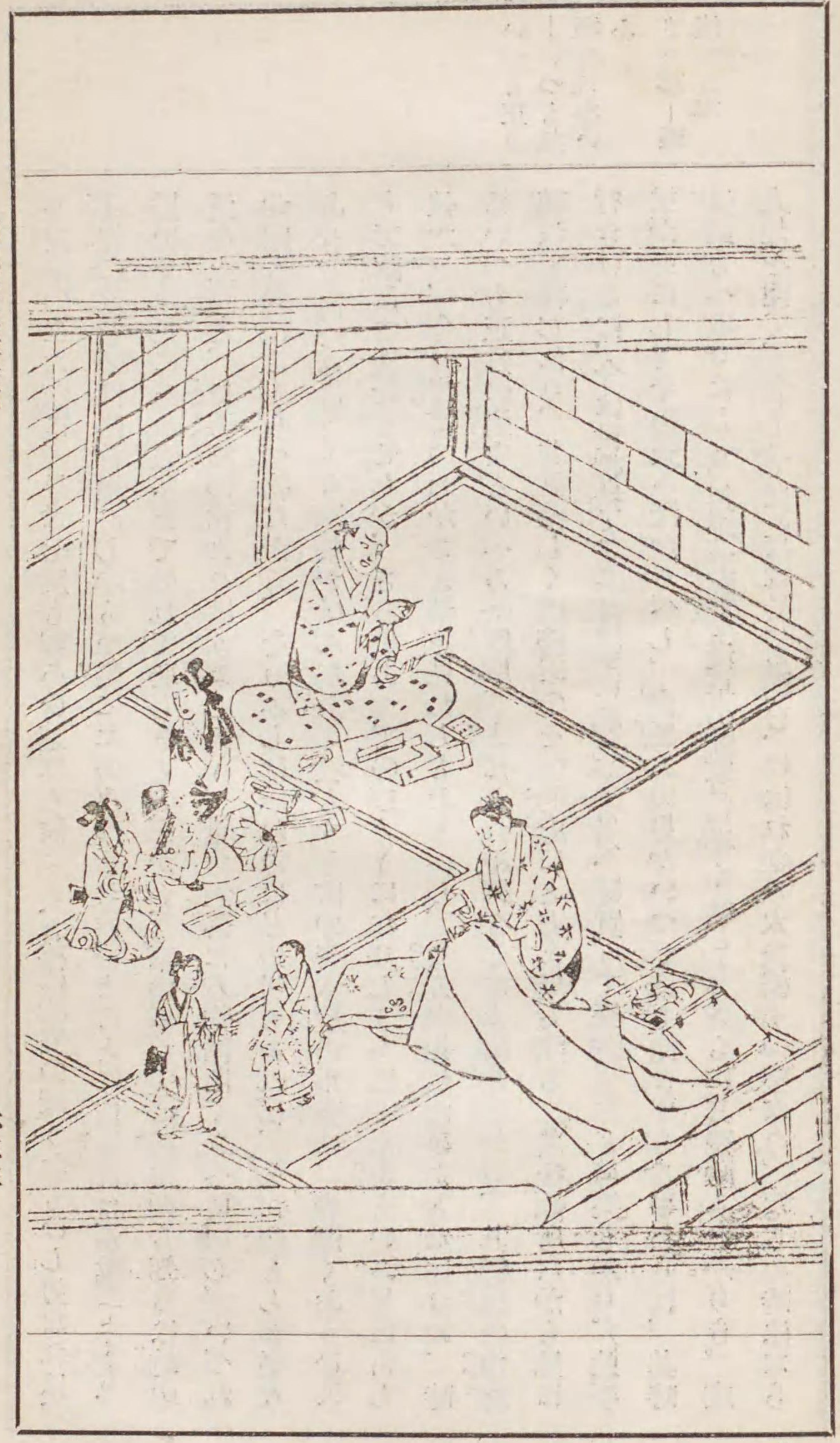
意氣地一原  
本意氣知に  
作る



息災—原本  
息才に作る

絹物してはし切の鼻紙、口すほめて楊枝くはへたる風情、末々にてもお町の仕出しは各別なり。或時揚屋町に行きて髭の長兵衛が端居して、久しぶりにて爰を見しに、お内儀又美しうなられた。亭主人の身は養生が大事と、悪口の後は大笑ひになして酒呑むうちに、小主水様が見えましたを幸に、何や彼や取りませせての情はなし。我等が男は上方にて無事かえ、なるほどく息災なるが所々で戀をやめぬ奴。京では一文字屋の今唐土大坂では扇屋の荻野逢へり。追付歸らば穿鑿なされ、少し身の痛いほど抓々して置き給へといへば、其唐土荻野さまは我等の指圖して合點逢はせます太夫さまなり。今日も傳馬町の清様より、唐土さまの文を我方へ御届けなされまして、珍しく拜し參らせけるに、少しのうち大事の殿さまを預りまして、たんと最愛くおもふに候、此程あだほれ遊ばし、是非に誓紙書くとて、まことらしくいぢられ、少しは小面にくう、その方さまへ言遣るといへば、至水は相果てけると、つくり戒名書きて、まざくと見せたまふを、あまり腹立ちてさもあらば、せめて三十五日はお精進なるべしと、同じ床にて肌を許さねば、いかい御詫をかし、其方さまおあつかひの書翰まるるまでは、いかなく帯解く事にあらず候、いかにしても捨てられぬ男、年をかさねての御懇羨しくおもふに、扱又本町の

戒名—原本  
改名とあり



西鶴置土産卷四



いつも正月  
—いつも氣  
樂なるをい  
ふ  
さる事—離  
縁する事

井筒屋の二六様に、早六七度も御あひ遊ばし候よし、是は我等の深うおもひし男なれば、其許に逗留の内は首尾あしからぬ様にたのみ參らせ候、まことに山川百里を隔てよも、勤の身は肌にある瘰癧子まで知れて恥しきものぞかし、京の事も爰に居ながら知るは蛇の道を上戸と、口添酒の常よりはうましく。兎角洒落たる物語聞くさへ面白し。いづれ女郎も勤にこしらへ物ながら、をりふしは忘れぬほどの男もあれば、又たのもしき事もあり、何に付けても馴染がほんなり。我もすみ町の青木屋の小藤に、春深くおもひ入りて請出す談合もせしが、さる事あつてのびくになりしうちに、小市といふ男に出し抜かれ、今一度町のおかさ姿を見たしとおもへど、行方の知れぬ事よとなげきぬ。時にいつも正月の道安といへる按摩取、未だそれを御存じなきは遅蒔なり、其戀種の由縁尋ねて存じたり、其君戀しくば柳原のその其處にとしま屋と語る。其後餘所ながら見に行きけるに、今は世帯持とて昔は手に觸れざるを、鹽買うて錢渡すなど可笑しかり。此亭主が身にして今の樂み深かるべし。自然あの男がいつぞ持ち飽きてさる事あらば、其時は此方へ取りたしと、無理立願を淺草の觀音に掛くれども、さらに其靈驗もなかりき。或人は是を聞て、さりとてはたはけたる願ひ、いはれざる太夫格子の望なり。ならぬ時はなら

散茶—下等  
の遊女

ぬやうに、散茶も暫くの慰み、異見すればきかぬ氣の大臣なれども、銀づまりほど口惜しき事はなく、其後は忍びくに行通ひ、昔は中橋の隠笠といはれし諸分知なれども、いつもある物の様につかひ捨て、差引残らぬ揚屋町も此躰にて通り兼ね、やうくこまがねの勢、行く人を笑ひし本町河岸の悪娼に懸り、又其時の氣になつて俄雨の歸路には、草履を紙に包みて腰に挿し、足袋脱ぎて懐に入れて、柄もりの傘貸すもせめては君が情なりと、土手の闇がりを賑るに、揚屋の男を三人に連れて花菱の二つ提灯、さしかけ傘に大袖の合羽豊に、羨しくも行く男を光にすかして見れば、親仁使はれし喜平次といへる手代なりしが、我等氣に入らぬとて追出せしが仕合となつて、太夫にあふ程の全盛、男ぶりも今ぞかし。是非も無き世の中、扱も生きては効もなかり、此悲しさに此道のやまぬは大方ならぬ因果ぞとよくく得道して、早今晚きりと誓文立てしが、明くれば又身を掴み立つるやうに思はれて、人目もはぢす通ひけるに、吉之丞といへる一奴の娼と、以前の太夫狂ひよりは染々と互に見捨てがたきうちに、無事に年もあきて禮奉公も一年勤めて、身は自由なれども久しき買懸り、四十六七々に差詰りて、兎や角物思ふを、爰はと取持つて不思議に残る寢覺提重を賣拂ひて、吉之丞が萬事をしまはせ、今日よりは私



ならぬ世帯  
—不自由の  
生活

の女房どもと手前に引取り、横山町の裏店に夫婦といふを樂みに、紙の賣入を縫ひ習ひてかすかなる煙を立て、夏は蚊屋なし、冬は綿入なしに、月日を送り年を重ねしうちに、三つ違ひ四人まで娘の子を設けしは、是程ならぬ世帯の中にさりとは情なし。遊女は子の無いものと聞きしに、何事も偽の世やと、其後は子の事をうたてく、同じ枕を並べながら人はしらぬ事、最早十一年何の事もせざりき。夫婦というたばかりに、世に住む樂みの一つ缺けたり。

三ノ卷よりは是迄西鶴正筆なり

二 大晦日の伊勢參わら屋の琴

女郎請出すといふも、少しの張合なり。近き比京の三木といへる男、島原に通ひての物好に、一文字屋の唐土よりはと上林の金太夫にあひぬ。否とも應ともいはれぬほど美麗き者なり。二三座首尾して後、亂酒の上にて一步一つ大事さうに取出し、女郎におくれば、是はと嬉しき顔つきにて、ひそかに戴きけるを、何が都の洒落者、ちらりと見て、

熊谷—熊谷  
盃

さもあるまじき事なれど、此太夫のすたるほどさもしく見えける。それより四五日も過ぎて、熊谷の大ぶりなる金の盃と、珊瑚珠の盃と重ねて、太夫に取らせければ、更に喜ぶ氣色も無く、金盃は庭掃く男に取らせ、珠の盃は双六盤の下に敷きて、微塵に碎きすてける。罪も慾もなき此心を感じ、是ばかりのおもひ入、何の子細もなく請出しける。此大盡は太夫の五人七人我物にして少しもいたまぬ身躰なり。此前長崎の鹿といふ大盡は、さのみ手前の宜しきにもあらずして、此さきの吉野に逢馴れ、そもく日言ひ交はして、追付根引して、我が本妻にせんとおもひ込みし、女郎の仕合なり。此男三條の唐人屋といふ兩替に銀三百貫目預置き、都にてよき所を見立て、家屋敷を求め、一生の身過、これにてなるやうにと思ひし銀子取返し、吉野を千三百兩に請出し、萬事の付届をしまへば、三百貫目も残つて、七貫目ありけるとなり。此内證にて請けるは、好色第一の男なり。されば此太夫は曾て遊女の風俗なくて、さのみ物いふにもあらず。弱々と見えて強く、然も情深く、たまくと逢へる男も心を残さぬはなし。首尾見合せて、根引にせんと思ひし男、其數をしらす。入のものにして後、是を歎きて島原通ひを留まるもあり。又はさわぎかへて、此里面白からすと、色河原の野郎に乗替ゆるもあり。吉



けおされ  
消壓さるに  
て壓倒せら  
るること

野、曲輪を出し後、京中の戀を惱ませける。其後此太夫を地女房に姿をつくり、難波の梅の比、天王寺の花の晝、谷町の藤の黄昏に、御所かづきの内深く、随分身のふりやめで、男は恐しき風情して、黒羽二重の紋無しの小袖に、龍門の帯も目に立たぬ仕出しなれど、數千人の形自慢の女中も、吉野が忍扮装にけおされて、いづれの細工人の、かくはつくりけると、外を見る人は無かりき。さては世の中の人も、目利は賢し。纒五尺に足らぬ身を、小判でのべたる上作物を見分け侍る。それより生國長崎へ舟路にてつれ下りしに、讃州泊の磯といふ所にて、夏の月平砂に輝きて、龍女も浪間より顯れ出で、京の吉野見んといふ聲、虚空に聞こえし美形。これにて見ぬ人は思ひ合せ給へ。たとへ分限なればとて七厘釜にて洗足を沸かし、刺鯖を霜月比に喰ふ人の目からは、痴漢のやうに思ふべけれど、既に人間と生れ、日本稀なる女郎を手活にするより外に、何たのしみあるべし。此大盡の遁れぬ人も、太夫の野風を請けて、伏見の里に洒落て住みける。吉野は東山の片陰、栗田口の邊の草屋、すこし都を離れての住居。男盛に法躰して、月にも花にも吉野を詠め、あした夕の樂みに、太夫が手づからの煎じ茶を汲ませ、萬に他の人をませず、碁相手、楊弓の友、暮には女鞠も色あり。風待つ納涼床に名の木を薫ら

せば、初雪の晨は歌に心をなし、世にある花車遊を盡し、雨の折節は杜鵑も鳴けかし、螢も數見る夜の慰み。又或時は夫婦水菜など拵へて、寢酒の種となす事、一入酔ひも面白かるべし。或年の暮に五條の市といふ大臣、左門といふ女郎を請けて、其花盛より今に契を重ね、随分世を樂自慢して、此娼を連れて年籠の伊勢參、何の信心にはあらず、榮耀ばかりの旅立。世間の忙しき折なるに、恐らく京都に我ひとり粟田口を行くに、小家がちなる所にて、正月の事どもやかましましき二十九日の宿に泰なる琴の音、唐弓の弦音かと疑はれ、笹戸をのぞけば、吉野がうつくしさ昔よりまされば、面影を見忘れて、いかなる公家の身を隠しては住み給ふぞと、東隣の火繩して賣るものに問ひ寄れば、長崎の大臣、吉野が連彈と、あらましを語るに、五條の市も我を折りて、此ゆるりとしたる世の暮し、我等は未だ忙しき所ありと、伊勢へ參らず、栗田口より歸りて、大晦日に女の歌舞妓ものを揃へて踊らせける。人の氣に移し心も可笑し。

三 戀風は米のあがり、局にさがりあり

朝はしれぬ世の中、善は急けと昔誰やらいひけるが、一つも是にはづれず。めつた的

朝一翌朝の  
意あしたと



傍訓すべき  
を誤りたる  
にや

の徳兵衛、盆の長兵衛などいふ、色里駕籠の者ども、浮世小路にさりとは隙なり。牧方へ二匁五分取て、抄のゆく事にはあらず。つらく野に出て、唐黍の根ざしを見しに、今年こゝしは風の吹かぬ年なれば、米商賣こめあひひま隙なり。大坂の色さわぎ、天職てんしやくより十五かこいまで買ひあけ、陰子の時花かげこるは北濱の若い者の勢いきほひばかりなり。雲に汁が出来て、雨のふりしこる跡あとは風と見定め、てんほに手をうち、思入の米買ひ一時ときあまりに立續たちつき、目ふる間に二匁あがれば、後は知れねども利を胸算用むねざんようにして、晝から駕籠の時花はやる事三百挺あまり、悪所へ乗込めば、俄に貰ひに歩あひりき、又は不斷ふだん隙なる女郎の仕合となり、揚屋次第にやかましく、愈雨の宮、風の神を祈りけるが、其夜そのよに入て空晴れて、青雲静あそくもしづかに月出れば、いづれも言合せたるやうに、小唄三味線もやめける。心をつけて俄大臣の顔つきども見るほど可笑し。こんな客に逢ふ女郎の身になるもうるさし。同じ北濱ながら奥州身請うけの大臣、あづまを山本に根引せしなど、名の立ちけるも、女郎の出世なり。椀わん久きうなどを其比は少し愚おろかなるを、お敵てきの不足ふそくの顔つき見えしが、是は我物を遣ひて、幫間たいこ其外そのほかにも嬉うれしがるものを遣りける。今洒落分しやれぶんに成て、太夫に逢へる客の末社をもつれず、時の風俗とて、木綿の仕立したて著物で、出掛けぬる人あり。此氣からは神ぞ傾城買ふ筈無し。下

ざくぬけ  
雨の洩るを  
いふ

帯おびの古きにも遠慮無く、面々めんめんの女房で埒あき事ぞかし。女郎狂ひといふは、男も衣裝好このみして色つくるこそ其效そのかひあれ。同じ米を搗うかずに食ふやうに思ひ、賣物ながら女郎も厭いやがる事いふまでもなし。女郎の著物きものに襟を掛けよるさへ、よき目からはよほど氣づまりなり。さるほどに今時いまときのしかけ、悲しき買手どもあまた見えたり。わづかの身躰みだまにて、親おやより老舗らいせの商賣あきなひ、又は職人も其一家いっけ、弟子でしなどの大勢を朝夕引廻てうせきはして、寄合過ぐるよあひあはと算用を立て、米も加賀の大ひね、或あるひはりうまい又は赤米あかこめ、百五十入の小あぢ、一文菜いぶんさいよりうちにあたるを吟味して、薪たきぎも船大工のこけらを徳と氣を付け、鯨油くじらあぶらの光がよいと爪つめに火を點ともすやうに節儉しえんしても、取葺屋根とりむきのざくぬけするを、此四年も葺むきかへる事のなにかぬる人の色道しきだうは分別の外ぞかし。茶屋狂ひもせぬ筈の者が、男つくりて天神買ふなど、此三十目の銀は家うちが働はたらきても、えいやつと五日ほどにまうけ出す銀かねにて、女郎狂ひはする事なり。つれ添そふ女房の夜著、蚊屋まで質に置き、二日拂ひのまを合せ年中ねんぢう二つ分ぶんつ先繰せんぐりにかよりて、幸の隙ひまなれば、此名月一つ出ようとすよめど、先づ下地ちのが濟すましてからの事と、揚屋から指圖さしづしられて、是非もなくやめて、たち歸りさまに思案して、ならう事ならば、何とぞ逢はして下され、此一つ分の銀かねは、此二十七八日



に心當が慥にござる。こなたにも銀戸棚が入りませうが、木を吟味して一つ拵へておこさうと言へば、私の方は錢箱で埒があきますと、餘所見して居て返答するも聞いて、何と親仁殿、何處も家の直があがりましたの、こちらの町でも此程二貫目屋敷に賣りましたと語る。亭主領きてこなたのお家にも何ほど借らしやりました、さのみ賣りへぎもござるまいといへば、外に借錢はなし、こなたへは損はかけますまい、月見は我等の逢ふやうにと頼む。扱も不便なる大臣や。あれから首尾を頼むに、これから言葉をさけて、さりとは無念なる男、斯様のわけにて女郎狂ひ、何の面白き事ぞと皆大笑ひすれば、此揚屋古文めきたる顔つきして、いふかいはぬか、只今の大臣様方、何の子細もなく銀に氣骨を折らず、快く此里へ通はせらるゝ大臣は、廣い大坂にものが五人までは見えませぬ。跡は火になる事も構はず、恐しき口入に書付を出し、騙半分の借り銀、或は手をよく吳服物を買ひがかり、是を賣損して爰許の付届をしたり、又は切の延びる藥種を買受け、其藏ながら質に置き、虎の子わたしにはしたまへども、一度は蛇の口を遁れず。今ほど惡所宿の迷惑なる事はなし、是は良き客とおもへば、人の嫌ひ手をつき、物にならぬ事幾人か、揚錢夜食、御所柿まで喰はれ損、昔は女郎に戀のつめひらきばかり談

利得  
賣りへぎ  
古文めきたる顔つきし  
しかつめらしき顔  
いふかいはぬか  
ぬか  
下にて  
こそあれ  
の字を加へて心得べし

虎の子わたした  
ふ「虎生三子」必有「一彪」彪最獷惡能食「虎子」也、余聞「獵人云、凡虎將三子」渡「水、慮」先往則虎食「子、則必先負」彪以往「彼岸、既而挈一子」次至、則復挈「彪以去、蓋極意關防、惟恐「食」其子」故也」  
(癸辛雜記)

合せしに、近年は内證の事を聞せば氣の毒がりて、紋日勤めて貰ひながら、其分の立つまでは物思ひける。假の契なれども、男は悪しく思はぬ事ながら、揚屋の不首尾うたてさに、其容のしがを見出し、裏繼のある肌著、龍門の羽織に木綿入るからは、何とも合點がゆきませぬと、女郎と宿屋と一つになる世とはなりぬ。是を思ふに、それ／＼の分限より色も奢り過ぎたる故なり。兎角本大臣の切目なり。昔日刀友が妻川に一度に衣装三十揃へて取らせ、布平が小太夫に黄金の櫛箱やる事又出来まじき事ぞかし。其時は笑ひしが、とまが四十五貫目に下屋敷賣りし銀を、直に役者に荷はせ、吉田十郎兵衛が所にてばらり／＼遣ひしも、玉市がきわだ染の小袖に紅裏の裾をからけて、雑木の割賣するも、泉平が文之助を請けて、一文づつが酢、醬油の店つきも、女男の昔残りてあはれ世や。



西鶴置土産

卷五 大目録

女郎がよいといふ

野郎がよいといふ

しれぬ物は勤女の子の親  
目に見ぬ戀に皆になし

始末は宿での事  
かけま藝づくし  
九軒に身は捨小舟  
世渡りはところてんの草  
石塔の施主まん  
先は班女が心入  
やまぬかよひぢ  
取沙汰の男め  
死ぬなどの御異見  
さる人に智恵あり



都もさびし  
朝腹の獻立

吉彌が藤見大ぬれの浪  
後世ぎらひあり  
宇甚がやぶれ紙子  
尺八は隣のめいわく  
火をたかぬ庵室あり

一 女郎がよいといふ野郎がよいといふ

いたり茶屋  
上等の茶  
屋  
鐵眼建立云  
云一鐵眼は  
黄檗木菴の  
弟子にて瑞  
龍寺の開山  
天和二年  
寂、年五十  
三

南江のいたり茶屋に遊んで、つらく鐵眼建立の唐づくり詠めて、あの銀の入目あれば、南西兩所の色遊び、亭主も嬉しがる程にさばかれけるに、無用の後世の晝、夜店の有難きを知らずやと、何心もなく酒飲みて、少しのうちの寂しさ、銀一枚の堪忍所と始末するうちに鏡鉢、鉦の音して火屋の煙立騰るを見て分別變り、何れなりとも隙なる子どもを呼びて遊べと、油太といへる大臣進みて、あるじと相談すれば、今日は私の物好、藝子さらりとやめて京からの旅子、各様を見知らぬを七八人取寄せて、ざつと踊りじまひにして、其後は蕎麥切、次に御行水、扱暮方より夜店でなければ夜があけぬと、野郎おかけに世を渡りながら、無用の女色をすよめ、身の上知らずめと大笑ひして、其京ども残らず見る事なれば一慰み、女郎の如く借ることのならぬが氣の毒と、大臣の奮み、只遊ぶ太鼓等が吟味するもをかし。時に亭主がいづれもを呼立て、一人々々見るまでもなし、すきくに埒のあく事がござると、内證の納戸の口を見せけるに、萬の張紙あり、まづ今宮の十日夷、日待山伏のお札、病目の妙藥、柱曆、其次に地芝居子どもの品定め、それよ



文作の三味線一作の小唄を三味線にあはせひくをいふ影人形一影鹽の長次郎一當時有名の手品師

り陰子の事を、かやうの宿々へ、それに付きたる若い者が書付を遣はし置き、かゝる折ふし物好によばす爲とてをかし。一花山藤之助、年十四、色白にして目付よく、嘉太夫節語り申候、一岩瀧猪三郎、年十六、踊上手投節語り申候、風儀其まゝ女のやうに柔にうまれつき申候、一夢川大六、年十五、酒振幾人様の御相手にも成り申候、文作の三味線能くひき申候、旅子の内では衣裳天晴著せ申候、一松風琴之丞、年十七、影人形能く使ひ申候、此外口から水を吹出し壁に文字をうつし申候、品玉、鹽の長次郎まさりに候、一深草勘九郎、年十七、物いひ此以前の鈴木平八生寫しに候、何も藝はなく候へども床達者に候、一雪山松之助、年十九、野郎なり、座に付きたる所、本子に取違へる程に候、さても才覺なる書付なり、何れも同じ直段なれば、中にも紫帽子が取徳ちやといへば、先はかさにかゝる男かな、彼方から十九と書付け出せしもの、三十九か四十なるべし。汝は二十一歳にして太鼓持、親父と一つ蚊帳に寝た心なるべし、縁の遠き娘の年隠すは二つか三つか五つか、二十を過ぎて振袖著るを、我町を離るゝまでは、足早に人の所思を恥ぢける優しきに、藝子年包むからは十違ひなり、京は大坂に下り、大坂は江戸へ行き、生れ日の知れぬ故ぞかし、何の善惡の沙汰、鼻の高い子供を揃へて、是ぞ天狗頼

安物は錢失ひ一諺

長徳寺一金一步をいふ廓詞

母子突當て次第の遊興と、十一人呼竝べ見たる所、何も一つに見れば面白し。野に咲く菜種もわつさりと、花は皆にて二兩三分がもの、さても安い事かな、過ぎし秋の比、南都に大臣の御供して木辻町の女郎残さず呼びて十六人、小判四兩で花やりしが、其所々々の騒ぎは可笑し、兎角安物は錢失ひ、是も可笑しからずと、すこしも早く落ちよと、十人立ち竝びて踊る最中にばらりと立ちて、新町筋を東の門より鳴り込みて、今の世の銀持大臣、御氣に入たる女郎あれば、勤め十年を目出たう親の内へ歸り給ふまで、お買ひなさると、男を立てる太鼓持九人前後取廻はし、お先へ、お敵より紋付の二つ提灯、揚屋から人橋かけて盛砂せぬばかり、追つけ是へ御成りご、九軒の井筒屋にさぶめきて、そもく、是は阿波の鳴戸に身は捨舟といふ大臣、我國にて銀も瓦も同じ事、大分持ちながら遂に揚屋の手にも渡さず、世間を見せぬ事を口惜しく、年に三度づつ銀捨てにばかり上れば、何事も大束に出て、末々までも喜ばせと、先づ女郎へ長徳寺二百、宿の囁に金子十兩、庭に使はると男女にも、小判の花を咲かせ、是をいかめしう今の世の大臣と、其鼻の高い事、大坂の廻りに天狗の住める山がなければこそと、おのく物貰ひながら誦りて、此おごり是はと一人も驚く人なし。しかも耳こすりに、女郎町は金銀使ふ所に



鹿—かこい  
女郎  
なげ—投節  
一日十七夕  
—かこいの  
揚代十七夕  
なるよりい

拵へ置けば小判珍しからず、此前松本といふ大臣の、くしろにて玉の井様に未だ馴染もない中に、桃の節句の祝儀とて、何心もなう金子百兩送られけるを、我も人も見し事なり、此程世上に金子の見えぬ折節なればこそ、一兩の小判も二度三度戴きけると、客あしらひの女房立並びて是を笑ひける。何れ女郎狂ひの極る所は銀ながら、一つは又仕掛もあるものぞかし。さのみ物も使はぬ男にまはりて面白がるに、かく又ばつとした事にて沙汰になるは、此大臣さばき悪しきに極ると、何れもの太鼓付添ひながら、行末頼もむからず。案の如く三年たよぬに國元の首尾損ねて手と身になつて、又大坂に上りて、所も廣きに長堀の北側に、我國方の者、借錢の海を抜け舟に越えて、爰の裏家を借りて、身過に心太の草を干して、今日の日を暮しぬ、やう／＼是にたよりて、迷惑がる宿をせばめて、無い内を喰潰して、無用の腹をふくらかし、しかも裏は吉原の揚屋町、鹿ばかりの寄所、引き唄ひのなげも勤めとて、晝前より夜半過まで腕と聲の續く程は、一日十七夕に當る程喚きける。昔はあれ位の女郎に笑ひかけらるゝもうたてかりしに、今の目にかよりて、二階座敷の簾を捲かせ、こいねふりして女郎に髭抜かせての樂み、さりとはさりととは羨しく、我世盛りに七夕の日の中に六十兩露にうちしも、彼男が二十夕に足らぬ今

ふ—露—纏頭  
蜘蛛舞ひ—綱  
渡り

入替—埋合  
せ

日の捌きも、傾城狂ひに心の變る事なし。十五狂ひをすれば三代にも盡させぬ寶を、大夫に懸かれば思ひの外はかの行く事を、今といふ今合點して、何の役にもたよぬ事ぞかし。小家の窓の旦暮、是に心を移しけるが、後には渡世悪しく、夜毎に蜘蛛舞ひの人形拵へて、朝に賣りて、此絲の細き事にて命をつなぎける。貧程心をかゆる物はなし、其後は小歌三味線喧しく、高堀一重の色里の事を忘れて、何とぞ雜煮を喰うて年をとりたき願ひ、三年あまり不自由に暮し、三十七の極月九日に空しくなりぬ。哀れや帷子も著ぬ死出の旅、繩からけの棺桶、道頓堀の野に送られて、餘所の亡者の跡さして、やう／＼煙とはなしぬ。今見れば竹林寺に山譽風雪と刻付けて、銀二枚ばかりにて出來さうなる石塔、施主は越後町まんと記るせり。如何なる女郎か立てられける、こゝろざしの程優し。此入替におもひがけなき銀貫ひ給ふべし。

二 知れぬものは子の親

至り穿鑿にして素人の珍重がらぬ物、本手の小唄ぞかし。番町に、さる御方の隠し藝に、八筋懸を忍駒にて引かせられしが、又もなき音曲、是を役者の九兵衛が御指南受けて學



むかしに成て云々古今集「さつきまつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞするし」  
 城俊一座頭の名  
 生れぬ前の襦袢定め一諺  
 逢坂の宮も云々「世の中はともかくても過ぎさまし宮も藁屋も

びしに、それも作彌むかしに成て、花橘も袖の香も、さる者は日々に疎し。浮世を短ういふ人、さりとは無分別、極樂に行きて精進齋喰うて、物堅い佛づきあひより筋鯉の刺身に夜を明して、落咄の大笑ひ、御機嫌取の城俊、目には見ねども彼の噂こまかしく譯をも知る事かな、我等今可愛がる太夫が久しく引込み勤めざる子細を知つたか。成程成程此御腹に若君一人おはしますといふ。誰が知らせたぞ、弓矢八幡深川の助六が子にきはめけるとや。それは生れぬ前の襦袢定め、此子が娘ならば十露盤もつて、男子ならば反古綴の帳を持つて生るべし。扱は町屋の大臣かと聞けば、何の事はござりませぬ、兩替屋のこまかなる奴が子なり、御前様も合聲なれば少しはお身に掛りたる事ぞといふ。何れも笑を催し、其大臣奉加に付かざるや。座中も耳にかゝる折節、いざ此坊主を勾當になせと、大分はづませ給へば、是は夢かや宇津の山を越えて、都の人に逢ふも嬉れしく旅の日數をかさね、今日は逢坂の宮も藁屋も昔の人、我身のつらさに一入思ひ出で、見えざる目の泪自ら手向ともなりぬべし。今はその撥音も絶えて琵琶の海も跡になして、日高に京入して三條の何某とかいふ人の宿借りて、官位の大願、其日柄を見合せける中に、都の大臣、吉野に逢へる一興に、いざ歩めとすよめられて、其人の引導にまかせ、東

はてしなけれはし蟬丸日高「まだ日の高くある比」  
 西島一島原初昔一銘茶の名

ぢややら、北の方やらむしやうに行けば、西島の細道名残をしさはと歌へる朱雀の野邊、誰ぢや、上林の薫、お茶は初むかしか、とてもものに此目を明けて見せ給へ、物越に罪を作りて、丸屋の七左衛門が座敷に入て、をかしけなる戀盡し、否とも應ともいはせぬ情、江戸に變りて物優しく戯れの亂れ酒に、城俊が手前にまはり痛むと見えし時、はんじやうといへる女郎見兼ねて、是をも助られしを、何もならぬ程嬉しくて、それから直に惚れ出して、よくく、なればこそ蠟の吸物喉を通らず、今宵の明けて歸るを待兼ね、人をたのみて口説き掛け、やうく、不思議の首尾して、忍びくに通ひける程に、合力の小判、包紙も残らず、今は官位の望も絶つて、東に歸るも及びなく、身の置所せまけれども、更に後悔するにあらず、女郎に逢はれぬ身の上を歎き、世に住むからの愁さなり、兎角は佛の國へと覺悟極めて行く水の、伏見の里の暮に迷ひ、六の衢の地藏を過ぎ、豊後橋の半渡りて、最期を爰にきはめ、かたみの扇に風は無常の夕ざれ、はんじやうが床の所思、何時の世にかは忘れじ、水もなさけあらば、今投ぐる身を渦に沈め、形を二度人に曝らすなと、足を揃へて飛入る折節、笹屋の何某わたり合せ、しかも見知れる法師なれば、是はと引留め、橋詰の侘しき茶屋に連れて、是非に様子を語らせ聞いて、此人も



二つの望一  
座頭の官位  
と戀と

藝は身を助  
く一諺

男泣きして、命ある故の戀なれば、しばらく京都に身を隠し、人の氣を取り勤め居ば、二つの望も叶ふべしと、智恵自慢の異見して、世上は何の沙汰なく匿まへける。誰か此事を告げ渡る、雁金屋の利右衛門など、由なきはんじやうに傳へければ、常の人とはかはりて、此零落れしを悲しく、私の衣裳諸道具の花車なるを代なし、密にたよりを求め、官位をすよめしに、思ひもよらぬ心使ひ、何とて請くべき子細なしと、京も俄にむつかしく、淀舟に飛乗り、難波の北濱に上りて、杖さへ持たぬ座頭の坊、身は薄衣に露霜置き、秋の哀れを人も知るにや、藝は身を助けて、糸による戀の歌、三味線ひく手に靡けとは、盲目神の導き給ふか。今は曲まぬ心から色事は捨てける。

三 都もさびし朝腹の獻立

身に相應の遊山は、天も尤め給はず。昔より聞傳へ見及びしに、宇甚といへる大臣、一生洗ひ小袖を肌につけざりしが、今は破れ紙子に風を引かず、紙帳といへる大臣、さりとては後生嫌ひなりしが、戀より起さねばならずして、夫婦妾女まで、墨の法衣とはなりぬ。京にても花崎、法師の世はやかましとて、聚樂あたりへ引込みけるも、女郎狂ひ

ふたをして  
ふたのをしての誤か  
よしの山  
山を雪か  
見れば雪で  
はあらでや  
これの花の  
吹雪よのや  
これの

に退屈するにはあらず、賢く立廻つて、色もやめ時知ると見えたり。是ばかりは限りなき物なり。中といふ過書町の大臣、男盛りに世を遁れ、是程樂みあるを、今まで知らぬは、さりとては遅き覺悟と、楊弓の鏃ごまに、一年を三貫目に盛りつめての世帯、昔思出して何か面白かるべし。大屋敷賣らぬ先なれば、智恵あるとも思ふべし。次郎といへる大臣の長町の下屋敷不思議に残りて、角内忠兵衛、髭の半右衛門などと面白く咄しくれて、尺八の手をよく、うき世を空ふく風のやうに見なしけるが、同じくは女の爲なるさし櫛、緋縮緬のふたをして、少ししたるき野郎を招き、色付の柱にもたれて、思ふ人におもてを背き、甲ばつたる聲にて、よし野の山を歌ひしを、ゆきつき次第に、竹にのせたるこそ色もありて聞きよけれ、塚口が天王寺に身を隠れしも、太子の如く子孫嫌ふにはあらず。人の心ほどさまぐの取置、各別にかはれる物はなし。役者の藤十郎が内證をかまはず、銀十枚出して大津の大鳥買うて、つね呑む酒の吸物にする事も、米がしのさがみ屋大臣、西の久保に身を隠れながら、惠心の御作を賣りて、すぐに太夫のちとせを買うたも殊勝なり。吉彌といふ振袖が野田藤見がへりに、福島に身をのがれし人の許へ尋ねしに、侘すまるなれば、さし當つてやるべき物もなしとて、小判五百兩、ほ



太子—聖徳  
太子の子孫  
あらせじと  
願ひしこと  
徒然草に見  
ゆ

しき物を買へとて、花車道具に事をかゝねば、家程よき物はなし、たとへ隠者なればとて、雨露にはぬれがたきに、何とて備利國といへる人は、宿も定めず暮しけるぞ。其比は京都の歴々朝夕の友とすれば、東山智恩院の門前町に居ながら、谷峰見晴す所をかりて、樂々と勝手をつゞけ給ふに、兎角是もむつかしければ、毎日おのくまはり番にして、銀二匁一分つたまはれ、是より外に望みなしといひける。それはいかなる事と問へば祇園町の辨當やへあつらへ、それがし一匁三分、小者八分にさだめ、朝夕の椀洗ふ事もなく、是程埒の明きたる事なしと、願ひの通りにして、草庵には小釜一つ、素湯わかして香煎より人をもてなす物はなかりき。或時森五郎、鏝三郎などいへる者、早咲の花にほりて、大和橋のほとりに、しるべの茶屋に遊び、洛中には是沙汰の、菱屋の吉まさりの姿を取りよせ、弾せて歌はせけれども、中々西島のあけほのには似もせず、朝とく起きわかれて、手水むすび捨て、壺うちの楊枝に齒をみがきながら、ふと思出して、彼の法師が許に尋ねしに、是はと朝戸明けて、難波の事ども、京の噂とりまぜての物語、四方山の松にひゞきて高笑ひ、程なく日影立ちのほれば、あるじ氣を付けて、是にて朝めしを喰へといふ。無用といへど、是非にとめける程に、然らば酒麩一種といふ。あるじ硯





お薬師さま  
へ土器云々  
— 龕平愈を  
祈るために  
社寺に土器  
を奉納する  
習あるより  
いふ

を取出し、せめて京でなりとも食悦しよくえつさすべし、何なりともさあ〜望みの獻立、まづ亭  
主すきが好にまかせて、汁は嫁菜たよきて雲雀ひばり、さて焼物は勢田鰻の各別なるをくうて見給  
へ、さて子もち鮎にの煮びたし、是では川魚過ぎたによつて鯛かほひを皮引にして、あしらひな  
しの鱠なます、さて忘れた事、堀川牛蒡ふとに、是でよいか、何ぞ引肴ひきざかな見合せにと書付け、客内  
證のあたま數讀みて、此六人前すこしも早くも、不斷の茶屋へ持ちてゆけと、小者にわ  
たせど、聞かぬ顔して火箸ひだりの手に持ちて、香かうの圖づのやうなる物を書きて居る。さ  
ては此でつちもお薬師やくしさまへ、土器かほらけをかくるかといへば、聞いては居りますれども、つ  
ねづね届か埒あかねば、一人の膳まじさへ、前々の銀かねもつてこいと申しました物が、かやうの  
振舞申してまゐりましてから、念もない事、いたします事ではござらぬと、おのが旦那  
を睨にらみつけていひける。此首尾大笑ひしてまぎらかし、いざ我々が宿へと誘さそひきて、取  
敢ずの朝飯あさめし四つ過になりぬ。彼の法師美食好み、酢の鹽のと舌うちして、大坂で喰うた  
る鰯さばらとは、蒸しても焼いても新しさ違ちがうた物ぢやと、世にある時を今も忘れざりし、夢  
のやうなる心ざし、さりとは〜萬事捨坊主にはよしと、此腹のへるほど笑ひける。  
これも昔は藤屋太夫職と、大坂に名高き朝妻に九枚つゞきの誓紙も、火うち箱のほくち

闇くらがりから  
牛一うし諺

とや成りぬらん。まことに闇くらがりから牛を引出すごとくに、樂寢らくねを起せど目を覺さず、  
晝顔の花の盛りをたま〜に見しとや。是もこれにて死んだ時は白帷しろかたびら子きせて取りおか  
れしと、京の人が語り侍る、南無阿彌南無阿彌。

京五條通升屋

青山 爲兵衛 行板



西鶴文集上卷終

(岡山製本)

大正二年五月四日印刷  
大正二年五月七日發行

有朋堂文庫  
西鶴文集上 (非賣品)

編輯者兼 發行者  
三浦理

印刷者  
平井登

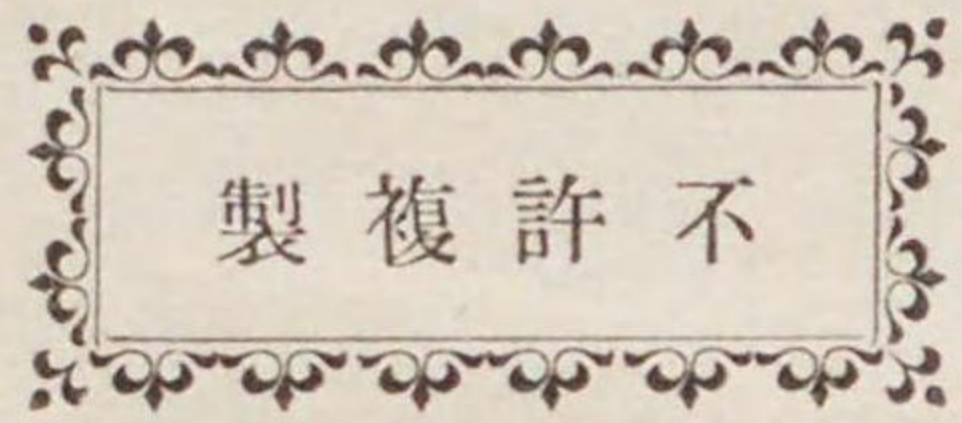
印刷所  
凸版印刷株式會社分工場

發行所  
有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

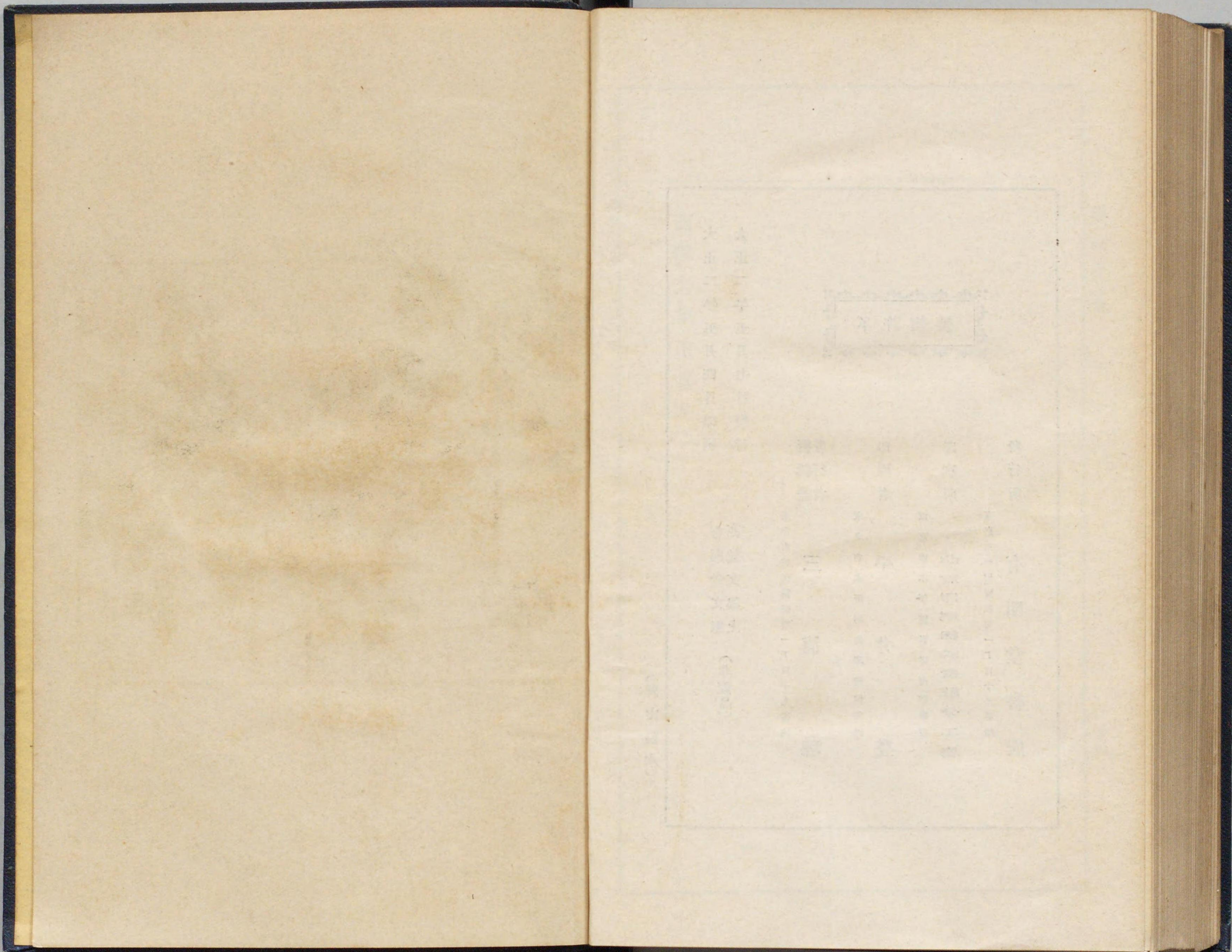
東京市本所區番場町四番地

東京市本所區番場町四番地



不許複製

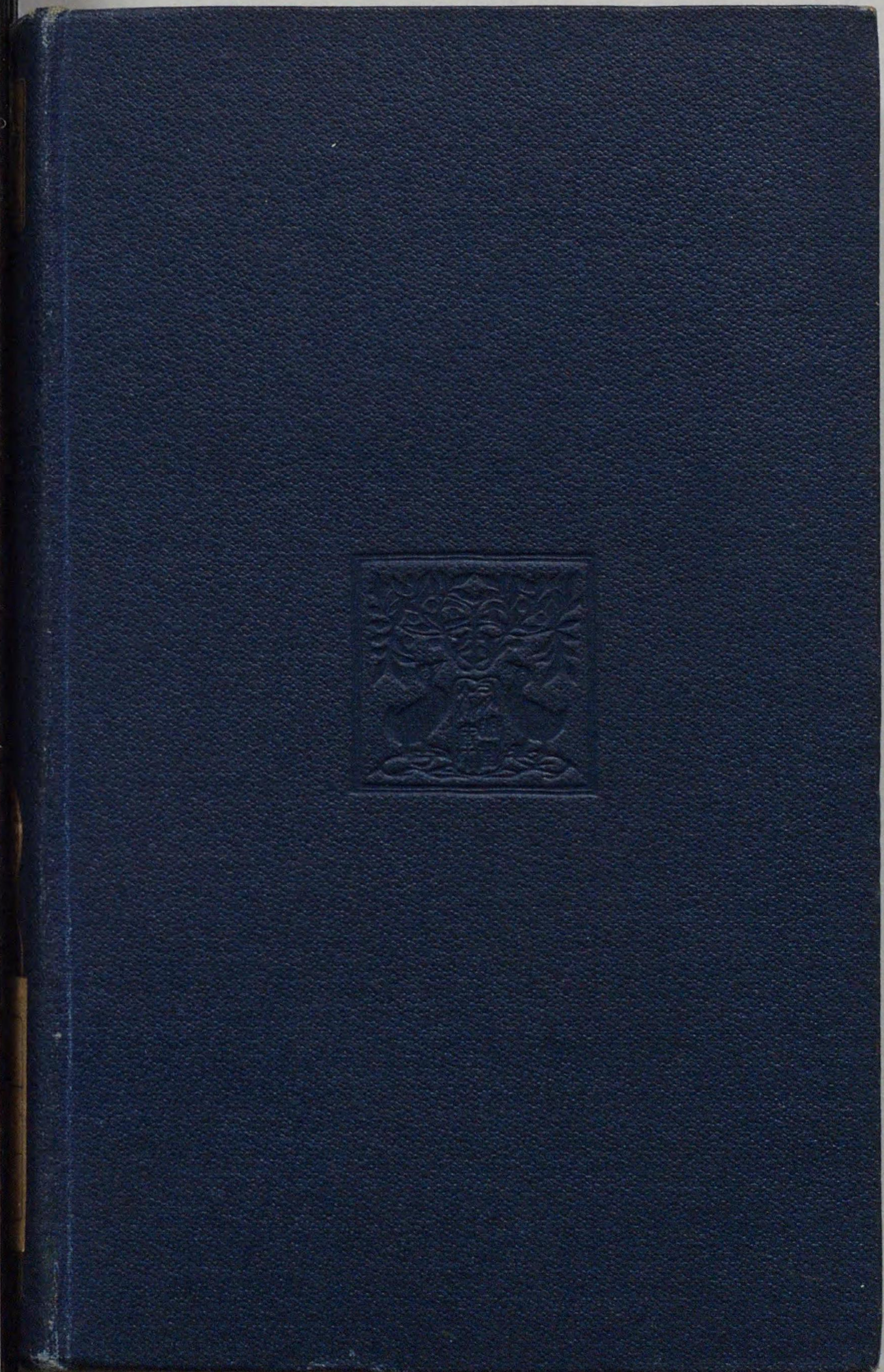














◎索引に付御斷◎

本文庫の索引は每冊必ず巻尾に付し來り候處今後は檢索上の便宜を圖り一部二冊以上にわたり候ものには最終冊の巻尾に一括したる索引を載せ候事に相改め即前卷名家隨筆集より其方針に隨ひ候間此段御領承被下度奉願上候

但近松淨瑠璃集の如く既に上卷發行濟のものに就きては從來之通每冊索引を付し可申候

大正二年五月

有朋堂文庫編輯部